傾城酒呑童子

近松門左衛門作

序詞千度看れば千々の意密し。一度見るに一つの憐い事深しとは。張文成が仙女に契りし詞。日々に衣寛び朝なく〱に帶緩ぶ。愁の腹寸々に斷つとは文成が仙女に別れしうらみ。天上下界なほ戀慕の闇を出でず。況んや心を種として和歌に和ぐ日の本の。色香にそめる梅櫻オロシ〽花山の帝と。申すこそ。地風雅なる御本性尊貴なる御容。潘安仁が外戚の甥にも譬ふべかんめれ。女御後宮數多さふらふ其の中に。大納言爲光が娘恒子の姫。一朝に選ばれ弘徽殿を御局にて。比翼連理の御語らひ三千の寵愛只一人。六宮の粉黛も色を失ふ日陰草。其の嫉み草身に生ひて。つひに病の床の内フシ短き。夢と消え給ふ。地帝不覺の御歎き朝政し給はず。雲の上何となくいまく〱しげなりければ。月卿雲客せめてはと弘徽殿の御姿。繪にうつして奉る容はありしに似たれども。物云はず笑はず却々思ひの種ぞとて。晝は夜の大殿に御涙を友とし。夜は南殿の月に御心を傷ましめフシ歎かせ給ふぞいたはしき。折ふし帝は。萩の戸の。地御階に悄々下りさせ給ひ。人やある人やあると召さるれど。宿直の公卿も程遠く御應へ申す人もなかつし所に。常陸之介平の安盛瀧口に候ひしが。安盛と敕答して御庭に跪づく。近うく〱と間近く召され。詞汝は武士の身なれども桓武天皇の御葉末。雲井を出でて遠からず物の情は知るべきぞや。地弘徽殿に露程も面影似たる女あらば。尋ね出して我が思ひ。晴せよかしとばかりにてスヱテ又御涙にくれ給ふ。詞安盛謹んで承り。さん候中納言高房が娘三の君は。顔容心ばへまで弘徽殿に見かはすばかり似たゝ由。御所中の取沙汰叡聞にも達しまゐらすべし。此の頃承れば鳥飼の少將彼の三の君を戀慕ひ源の賴光が郎等渡邊の綱を仲人に賴み。近々に婚禮取結ぶとは申せども。普天の下王土に住んで。敕諚と申さんに誰か違背仕らん。地安盛不肖の身なれども御文一つ賜つて。彼の姫に與へ父母に申し聞かせなば。今宵の中に伴ひ參り弘徽殿の御忘れ草。宸襟を安め奉らんとフシ忍びやかに奏すれば。地主上仰せありけるはいさとよ三の君が弘徽殿に似たるとは。かねて朕も聞きしかど渡邊の綱が仲人にて。鳥飼の少將にまみゆるとな。然れば主ある女ぞかし。讓位の後は例もあり在位の身にて正なき事。上一人の善惡は下萬民の鑑ぞや。後代の誹りも恥かしし此の世の戀さへ叶はぬを。まして冥途の人戀しき思ひはいかなる思ひぞと。十善天子の御身にも。世を辛

しとの御述懐懸路の習ひわりなさよ。詞安盛重ねて宣旨恐入り候へども。さりながら一夜も夫の家に入り。夫婦枕を並べてこそ主ある女とは申すべけれ。未だ契約ばかりにて親の家を出でざる女。何條事か候べき殊に仲人渡邊の綱。羅生門の鬼神を斬りし愼とて。物忌に籠り傍輩の對面も仕らぬと承る。地然れば祝言の日限ものび／＼と覺え候。これ屈竟の折から仕舞せて參らせんと。勸め申せば主上もしるべ嬉しき戀の山。踏み通ふべきかけ橋せよと宸筆もこまごまと。艶書あそばし此の度の恩賞は。望み次第と宣旨ある安盛烏帽子を地につけ。詞只今源家の繁昌にて滿仲より賴光まで。鎭守府の將軍に任ぜられ平家はあれどもなきが如し。地此の御使仕舞せなば賴光が將軍職を。某競望仕らん最早夜も更け候ひなんず。宿所へ歸らず是よりすぐに參らんと。御文賜り上書見れば上々とても痴話文は。別に變らずさま參る身よりとばかり薄墨に。御筆立のうづ高さ。御文體までさぞさぞと。思ひ梨地の御文箱蒔繪に照りし菊桐の。䕺が思ひは深けれど人は情も朝霜に。置き惑すなと傳へよと常寧殿に入り給へば。主殿司の宿直守。御格子。參る 三重

一セイへ扨も渡邊の綱は。假初の人の詞の爭に。羅生門に行向ひ。茨木童子が腕切取り。詞三七日の物忌に。門戸を閉ぢて 地愼みしフシ武勇の程こそゆゝしけれ。地一人武者保昌は綱が徒然尋ねんと。舎人馬添只二人肌に腹巻如月や。空もおぼろの月毛の駒前に手綱かいくり。平井の保昌が御見舞申す物もうとぞ呼ばはりける。詞門を固めし堤の彌惣。唐居敷を飛んで下り。地に鼻をつけて御出の由申し入るべく候へども。主人綱事羅生門にて鬼神の片腕切取り。三七日の物忌に籠り候へば。門外にて拙者承り帳に記し。一門他門共に對面仕らず。然るに一昨日渡邊の叔母。久しく逢はざる懐さゆかしい懸しいなんどとて。七十に餘る身がさま／＼歎き恨みしを。變化の業とは思ひも寄らず。恩愛捨て難く門を開き對面せしに忽ち悪鬼と現れ腕を盗んで天井より。地あれ御覽候へあの如く。搏風を蹴破り黑雲に入つて失せ候。綱は是を無念に存じ切腹のお暇申すか。一期の浮沈と籠居の節帳にとめ置き後程申し聞かすべし。近頃無禮千萬と慇懃にぞ述べにける。詞保昌搏風をきつと見上げ。ムヽウ聞きしに違ひなかつしな。さりながら鬼の腕を取返され。それが無念な口惜しい切腹せうといふやうな。不覺人の渡邊に逢うて何の用もなし。地左樣の男と知らずして馬の足費して。見舞に來たる保昌まで不覺者と人や見ん。門に立つも穢はしと駒引返し。歸らんとする所にまて／＼保昌用があると。聲をかけて渡邊塀の上につつ立上り。詞ヤア珍しい保昌。御邊と某御前にての爭ひ故。其の夜羅生門にて鬼神の腕を切つたる事定めて音にも聞きつらん。三七日の物忌過ぎば。鬼の

腕を御邊が面へ投付んと思ひしに。地口惜しや腹立や化生の業は力なく。やみ〳〵と奪取られ渡邊程の武士が。鬼神退治の證據を失ひ表裏者の名を取らん。弓箭の恥辱せんかたなし人間業にて此の無念。晴さん事叶ひがたし某も腹切て。共に變化の鬼神となり再び腕を取返し。御分が眼に晒すべきぞよい所へよう來たナア。詞渡邊の綱が腹切るをよつく見置いて賴光へ。御物語仕れ今生の對面是限り。地生を替へて茨木が腕取返し逢ふべきぞ。必ず〳〵其の時に變化と思うて喫驚すな。昔の誼に取つて嚙もとは云ふまいと。飽くまでに廣言し既に刀に手をかくれば。詞保昌大聲上げてかツらかツらと笑ひ。やれ腹筋や腹の皮。鬼の腕を切つたるが何程の高名ぞ。それを手柄と思ふ故又奪はれしも恥辱と思ふ。エヽあさましやかはいやな。此の保昌などは。切つたを手柄と思はねば奪はれても恥ならず。變化鬼神を鎭むるは禰宜山伏行法の。出家の加持の數珠さきにて祈り伏するも珍しからず。地弓矢取る身の功名は。鬼より怖い朝敵大敵を滅し。生捕分捕譽を子孫に殘すこそ手柄とは云ふべけれ。是しきに腹を切らうと云ふやうな。馬鹿侍の切腹を見て居るやうな目は持たぬと。引返し駈出づる太刀の鐺を渡邊塀越しにしつかと取り。詞ヤアさは云はせぬ保昌。左程侮る渡邊を見舞に來たは心得ず。笑はん爲か褒めん爲か。地聞かでは得こそ返すまじ。留れとこそは引いたりけれヤア一人武者保昌が。歸るといふを天津風雲の通路吹きとぢて。天地を動かす勢ひにもとまらば留めて見よやとて。鯉口鐔に握り添へ鐙ふんばり乘りすゑたる。ヲヽ汝は聞ゆる歌人にて大内にての花盜人。華奢風流の口ずさみ辯舌は利いたりとも。鬼神を取挫ぐ渡邊との力づく。ちつと慮外と夕闇の羅生門にて我が兜の。まつかうこそは引いたれとしやくつて引けば保昌は。振放さんともぢり引く。留まれとまれのうなり聲コハリかなはじ物と怒り聲。磯の松風巖うつ波。兩頭の大蛇が常山の山の腰。きりゝ〳〵と卷締めて頭を並べ引合ふも。是にはいかで違ふべき兵庫鎖の白銀作り。筋金蛭金鍔の金かへり栗形裏がはら。中は如何なる名作の干將莫耶ござんめれ。鞘と一つに綯交の繩になさんと左へ捻ぢ。卷かれじものと右へ捻ぢえいや。〳〵の地力聲フシ太刀の帶取りくつろぎて。飾の金具搖ぎ出でからり〳〵からり〳〵と鳴る音は。地コハリ諸漏已盡の大阿羅漢神通力を試さんと。須彌山を動かす時色界に風起り。四王忉利の大伽藍百億の寶鐸。那由陀の羅網八萬恒沙の瓔珞華鬘雲井に散つて鳴渡り。響き渡るもかくやらん。此の世に譬へん物はなし。保昌は古兵太刀損じては惡しかりなんと。するりと拔いて帶取をふつゝと切て切放し。馬乘放しすつくと立てば綱は鞘を持ちながら。塀の上に突立つて睨み合うたる地面魂。阿吽の仁王に異らず。

フシ凄じ。かりける勢なり。地龍虎と挑む其の中に段模様の染被衣。供の女が頬被御所の抜粋。二人が中へ怖氣もなくしやんと分入る追風や。茨の枝に初花の フシ一輪咲きたる如くなり。地兩人怒つてヤア誰かある。詞此の女引摺りのけと睨めつくれば。被衣押退け何と渡邊久しいの。其方は音に聞く保昌の。我こそ中納言高房が娘三の君。これ渡邊。そなたは武士か侍か。鬼の腕は切りやらうが侍とは思はれぬ。烏飼の少將殿と自らが祝言は。後の二十八日とは仲人した其方の極め覺えがあらう。二日も三日も手前から萬事取持ち肝煎るは仲人の役ならずや。今日で十日に餘れども何の便宜音信なく。父上は腹を立て使を越しても門を閉ぢ。取次ぐ者もないとある。コレ世間の娘に問うて見や。十六七になつてから嫁入を急ぐか急がぬか。せかぬ娘があつたらば二つともない首賭け。地少將様も若い殿。駈出る馬をとめるやうにお心も急かうし。我も思ひの溜り水身も湧き出づる池水に。人目堤の切れ口はいかな留めても押へても。思ひ流すに流されずサア返答聞かんと仰せける。詞渡邊も至極につまり御尤千萬なり。さりながら東寺羅生門の變化を討ち。三七日の物忌に引籠り出仕をさへ仕らず。殊に常陸之介安盛と源平武勇を勵む時節。地不覺の批判受け候へば源家の油斷と身を愼み。御祝言の御挨拶日限までも延引。追付首尾なし申すべし聊か如才是なしと。云ひもあへぬにアヽおきやおきや。詞如才なしとは云はれまい。自らは弘徽殿の女御樣に似たとやらん叡聞にて。未だ祝言せぬ内に大内へ召されんとて。平の安盛お使只今館へ來る故。地我も乳人一人つれ漸うと逃出でたり。今宵の中に嫁入せねば明日は内裏へ召さるゝ筈。其の褒美には賴光の官職を削り。安盛を鎭守府の將軍になさるゝ由。我々思ひ叶はぬのみか源氏のひけと云ふものよ。かゝる大事のありとも知らず。傍輩喧嘩の保昌も保昌。是は如才であるまいかいや油斷では有るまいか。如才ないく\と口でばかりは子供も言ふ歌さんさ如才は御座らぬゑ。歌にも謡ふ聞きやらぬかと フシ恥しめ。恨み給ひける。地保昌横手を打つてなんと渡邊。姫君のお咄は正八幡の御託宣。遅なはる處でなし。思案はないかと云ひければ。ヲヽ思案と云うて姫君を烏飼殿の御館へ。入れ申すより外はなし御分と我とのいさかひは。根も葉もない内證事お手前賴む。少將殿へ參つて片時も早く迎の輿を。賜るべしと申してくれたら滿足せんと云ひければ。ハテ此の上﨟を内裏へ上げ安盛に威をつけては。我が君の御恥辱いづれも我が身にかゝつたこと。然らば我は斷付けん先づ姫君を奥へ入れ。隨分大事にかけ申せ必ず人に逢はするな。渡邊の叔母が又來たとも。毛の生えた鬼の腕姫君には一本も。なしと答へと戯れてオクリあなたへ打立て フシ走らする。地渡

澁は姫君を奥に請じ門々を。なほも嚴しく篝提灯星の如く。婿君の迎ひの輿今や。今やと 三重〵 待つ程に フシ小夜もやう〵。地ふけにけり稍あつて表門。忍びやかに音づるゝ何方よりと應ふれば。詞鳥飼の少將實兼が雜掌花垣權頭。保昌殿の御内意によつて。三の君の御迎ひ儀式の車は追つての沙汰。地先づ御乘物取敢ずとこそ云ひ入れけれ。待設けたる家來ども門を開き入れければ。綱は悅び姫君を婿殿へ。渡せば珍重氣遣ひなしと。兎角しつらひ乘せ參らせ乳人は輿に引添うて。堤の彌惣主人の代腹卷打ちかけあたりを守護し。迎の諸太夫駕輿丁と。共に乘物引つ立てて フシ飛ぶが如くに急ぎける。地五六町も往きつらんと思ふ所へ。保昌大勢引具して一文字に乘歸り。詞少將殿の雜掌花垣權頭。輿を持たせて御迎に同道せり。地とく〵姫君渡されよと勢かゝつて云ひければ。綱は大きに驚き弓矢八幡安盛奴に誑られ。三の君を奪はれし天が下にて此の渡邊を出し拔いて。片時も生けて置くべきか掴み拉いでくれんずと。跳り出づるを保昌捕へて。詞こりや物に狂ふか渡邊仔細を語れと止むれども。地いやまだ〵と阿呆らしい。哄さるゝ事でなしと。飛んで出づるを押留むる若黨ども口々に。詞たつた今少將殿より。顏も衣裳も寸分變らぬ花垣殿。姫君を迎取り此方よりも堤の彌惣。附けて送られ候處又只今の御迎ひ。かた〴〵不審に候と。云ひもあへぬに保昌はつと肝をけし ヲヽ是は渡邊せくも道理。疑もなく安盛奴が花垣によく似たる人を。豫てこしらへ深き巧みと見えたれば。卒爾にては此の方が。天子に敵對賴光の御爲ならず。地堤の彌惣が附くからはさ迄不覺も取るまじきぞ。心を鎭めて追駈けん此の保昌が加勢ぞと。人數の手配り手を合せ。水飼ふ馬の轡を並べてこそは 三重〵 打たせけれ フシ堤の彌惣。地忠時は乘物守護し行く空の。春雨しきりに風落ちて雲の足さへ定めなく。南北に飛び東西へ フシ戻橋に着きけるが。地コハリ黑雲道を障つて雷火電光震動し。前後を忘じて立つたる所に迎と見えし者どもの或は一角一眼または三目八臂の鬼形。枝ある角に赤頭火焔の如く見ゆるもあり。異類異形の鬼神となつて乘物蹴破り姫君を。引出さんとする處を南無三寶と堤の彌惣。打物拔いて切拂へども雲霧に。眼も眩み腕弱り切つても突いても水を切り。風を切るが如くにして踏みもためず欄干に。うんと云うて反返れば召具の者ども堪り得ず。弓手馬手へぞ伏しにける乳人是はと取付くを。二つにさつと引裂いて姫君を引摑み。惡風吹きかけ焰を降らし。虛空にどつと笑ふ聲 フシ雲に。殘りて失せにけり。

あなり打立て三重〵 打寄する。フシ岸の漣玉走ろ。誰が堀江で水高き。矢を射る如き川の瀨な。戻橋とはフシ附けぬらん。地川岸に積みたる材木の中に薪は交れども。火の氣なければ

暗き夜に。地思ふ殿御に逢ひに行く姿ぞ女子一生の。締ひもなく三の君。花紫を戴いて。びらりしやらりの町風も。帽子に漏るゝ衣の香の。娘は同じ娘にてフシ御所こそ色の司なれ。地綱が郎黨八十の吉平次。跡に續いて見え隱れ姫君の御供し。女の足の急げとも。十町餘りを行惱む。道はか行かず一條の戻橋に行きかゝる。先にのさばる懐手。肩で切る風馬廓奥く。身の程知らぬ高聲も。辰巳上りに嗄れて。歌高い山から谷底見れば。おまん可愛やナ布晒す。ナ布晒す。詞コリヤお上藹どこへ夜道を。ござるは戀じやの〳〵。戀人は誰か知らぬが。此の鼻が一寸地間しようかいと。縋りつけばアヽうるさいと。そつと退けば又縺れ。しんぞ其の風たまらぬと抱付けば又外し。取付く處を吉平次腕取つて撥ね除け。詞これ眼をつぶれ。此の女中は恭くもうぬが小錢で買ふやうな賣物でない。ほで惡戯かはかずと。通れ〳〵と言ひければ。汝や此の女中の附者か。盲め。身を鉢坊主と思ふか通れとは。通るまいが何とする。サア何とすると仕かくれば。吉平次も大事の伴怺へて見れども堪られず。チヽ是で通して見せんずと。地拳を固め目鼻の間割れてのけと丁と撲つ。ヤ汝撲たれてゐようかと。松の木腕たゝ込廻す。手頸を取つて振放せば。突つかゝり捻合ひ摑合ふ處へ。綱が弟三田の源八。吉平次ばかりは氣遣ひしと。御跡慕ひ來りしが。遙に見つけゆらりゆらりと立寄つて。相手の肩骨ひつ摘んで引除け。詞これ若い人。此方を見れば女中同道。お主が叱つて手柄にもならぬ事。殊に少しこちらは酒氣もあるさうな。參りかゝつて男が扱ふ。堪忍してお通りやれ。イヤ馬鹿め。身體自慢に人らしい扱ひとは。ほんの男の出入。わい等が知るこつちやないと打つてかゝる。小腕むずと摑んで得手物。ヤこれはいな腕車にどうと投げたりける。地積詰に積んだる割木の木蔭より。馬屋の總五杵の割木おつ取りのべ。源八が眞甲欺し討二つになれとはつしと打つ。打たれてひるまず總五を取つて差上げ。こりや〳〵〳〵。割木の中へ投込んで。詞ヤレ吉平次怪我があろ側へ寄れ〳〵とフシ言ふ處へ。地こゝかしこの割木の蔭より十人ばかりむら〳〵と。手ん手に割木提げ〳〵押取り廻す。詞ハアヽ知れた〳〵。扱はうぬ等は平の安盛が郎黨ども。町人の行きかゝりに紛らし。姫君を奪はん爲の喧嘩のしかけと見た。見た。三田の源八渡邊の綱が弟。汝等では相手に足らぬ安盛は何處にある。姫君のお供なれば随分蟲を殺して太刀刀は拔放さぬ。地汝等に振舞ふ物が此方にある。櫓持出し肩ずかし。負投懸投腹櫓と。尻ひつ褰げ四股を踏み。朱に染みたる前髮は。赤髪の如く打亂れ。大手を擴げヤア勝負。いざござれと喚きしは。フシ只雷電の如くなり。詞チヽよい推量平の安盛。三の君を置いて行けと打ちかゝる。地敵は八方我が身は一人。同じく割木おつ取つて。てつぺいそつぱう肩骨胴骨天窓の骨。割木限り腕限り。打合ひ〳〵投合ひしは。風に揉まるゝ古家に柿の散るが三匣八へ如くなり。地源八獅子の

勵みをなせども。嵩にかゝつて打ちかくれば。もう斬られねばならぬとするりと拔いて馬屋總五が胴骨ぐつと刺通せば。うんとばかりに死したりけり。すは斬つたはと呼ばはる聲。吉平次堪られず躍り出で。眞先に進んだる矢島の傳平が片腕どうと切落し。逃足したる大勢を二人が中に押取りこめ。太刀と割木の金尅木。火花を散らし三重〱切立つる。地此の勢に怖へずして。北へ走り南に飛び。聲も高き橋も高き。フシ闇を分けてぞ逃失せける。詞渡邊の綱平井の保昌。息を切つて馳着け。我々兩人少將殿の御館へ參りし處。姫君御入りなしとある心元なさ。是迄迎ひに來つたり。廣綱は傷を負うたな。ヱヽ言ひがひなし卑怯千萬。盜賊の業か口論か語れ聞かんと睨付くる。卑怯とは情ない。平の安盛三の君を奪はんとの催し。樣子は緩々申すべし。それ吉平次姫君を兄きへ渡せ。地保昌殿御苦勞と。一禮そこ〱姫君も。怖いやら悲しいやら。一期の憂い目見たぞいの。詞其方衆に逢うたればっ胸の躍も鎭つた。地早う館へ連れて往て。少將樣に逢はせてや。大抵撫でもらはずば。お腹の痞は下りまいと。フシ言ふも笑ふも戀なれや。地お道理〱いざ此方へといふ雲の。俄に天地震動し。綱保昌が姿は其の儘鬼神となり。姫君を掻抱き飛去らんとする處を。南無三寶と吉平次打物拔いて切拂へば。廣綱も一世の大事。疵も忘れて打ちかくる。雲霧に眼眩み腕弱り。切つても突いても水を切り風を切るが如くにて。踏みもためず欄干にうんと言うて反り返れば。鬼神は姫を引摑み。惡風吹きかけ火焰を降らし。虛空にどつと笑ふ聲。フシ雲に殘りて失せにける。

地雷鳴る騷ぎに綱保昌あはやと驚き馳着け見れば。乳人が死骸乘物も散々に引捜し。(廣綱は朱に染み吉平次ものた打つて一本)三()はましまさず漸う堤を呼び助け。事の樣を尋ぬれども變化の所爲は力に及ばず。無念々々とばかりにて フシ言說正しからざりけり。地綱は怒つて齒ぎしみしヱヽ口惜しや保昌。詞必定是は羅生門の。執心殘つて我に恨をなしゝよな。地微塵に碎いて棄てんずと。天を睨み大地を踏み身を揉み猛り廻れども。翼なければ虛空も飛ばれず。怒れる眼に怒の淚。峰の夕日に夕立のスヱテ雨を濺ぐが如くなり。地かゝる所に平の安盛平家の一族五百餘騎。橋の兩岸おつ取り卷き。詞やあ〱それなるは渡邊の綱宣旨なるぞ承れ。高房の娘三の君帝より召さるゝ所。遮つて是を押へ剰へ失ふ段。朝家を輕しめ奉る罪科によつて。搦取つて參らせよとの綸言。違背に於ては首討つて曝せよとの御事なり。恥を思はゞ腹を切れと 弓杖突いてぞ呼ばはりける。綱は莞爾と打笑ひ。やれ〱嬉しや相手ほしう思ひしに。平家の大將安盛とやそれこそ綱が 地口なめずり。變化より先つ己れをと。躍り出づれば保昌やれ待て渡邊。平家にもせよ。敵にもせよ宣旨とあれば勅使なり。上へ對する朝敵と云はれては一大事。先づ穩便に引取つて負けて勝つ思案もぞ。鎭まれと制すれど

もいや〳〵聞かぬと駈出づる。詞安盛は勝にのり。地じばれくゝれと下知をなす三方論議の眞中へ。坂田の公時例の大太刀前下りにさしほらし。のつさ〳〵と歩み來る安盛はつと色ちがひ。肩身をすぼめ軍兵のフシ中に屈んでかくれけり。地公時は橋板も踏抜くばかり立はだかり。詞たつた今まで此の所に平の安盛が見えたが。掻消すやうに失せたるは是も變化の業なるか。變化を斬るは綱が得もの。又人間のぶう〳〵をひね り殺すは此の公時か好物。何處へ失せたと睨め廻はし。ヤアそこにか。これ此處へ御座んせ盛樣。それはわけが惡いぞゑ。怖い事はないわいな。御座んせなあと地小手招きフシ鬼の痴話かと氣味わるし。詞安盛もこは〳〵ながら。さいふは坂田の公時な。我は天子の御使下郞の側はけがらはし。云ふ事あらばそれから申せ云はれぬ所へ出しやばつて。側杖にあはん不便やと地顫ひ顫ひもロへらす。公時たまらず暴出でて前なろ軍兵引つ掴み。取つては投げ〳〵安盛を宙に引つ立て引きずり出し。詞欄干にどうど打付けやい嘘吐奴。綱が討手の勅諚とは何の王樣の勅諚ぢや。日本の王の仰せでないはたつた今賴光。禁中で聞かれた大騙のもがり奴。此の公時は閻魔王の勅諚にて。己れ等が討手に向うた地獄で手間の入らぬ樣に。地粉に碎いてやるべしと元首押へて胴骨を。ゑいやうんと踏付け。〳〵さいなめばアヽ詞痛や苦しや。ハル免してたも公時僞りとは云ひ乍ら。帝戀慕の御歎きいさめん爲の忠節。證據は爰にお文もあり。さりとては誤つた免してくれと泣きければ。地保昌渡邊すがりつき假にも天子の御使。勅書を懷中せし者に足を當つるは後日の越度。あやまるからは免してやれとやう〳〵にもぎ放し。サア歸れと引つ立つる命拾うて安盛は。足はやに立退きしが立歸つて大音上げ。詞宸筆勅書を持つたる人には三公だにも下馬する作法。頼光が郎等ども勅筆の御文を。土足にかけて踏んだること只今直に奏聞す。詞をつがうた詫ぶなと云ひすてゝ引返す。地公時其の顔引裂かんと飛んでかゝるを綱保昌。洛中變化の騒動に取りまぜて事やかまし。先づ鎮まれと制すれども公時はたつた今。詞夜食を喰うた食ごなし變化も鬼神も悪人も。地一ごにしまふと駈出づる留まれ止まれいや放せ。放せとゞまれとり〳〵の鶏の八聲や鐘の聲。夜はほの〴〵とあかねさす。公時が顔朝日の色につれて。御所へぞ上りける。

第　二

地心の底の悲しさを涙の外は知る人も。亡き俤は忘られず三の君の父母。高房夫婦の御歎き未だ生死は知れねども。失ひし日を命日と。回向追善今日もまた。フシ墓參りして歸らるゝ。地お供の腰本下婢まで愁に沈む其の中に。右近と云ふは姫君と同年にて。殊更中よく手習絲竹の道までも。一つにおふし立ちければ。スエテ其の身の歎き父母も。やれ右近よ。病で死するは世のこと

わり。火葬は骨土葬は身體残れども。變化にとられし三の君。兄弟とてもあればこそ何を形見に慰まん。おことも姫も同い年雛遊び石な取り。振分髪より仲よしで主従のやうにはなかりしぞや。今日より我々養子にして。姫が再び歸りしというてなりとも樂まん。お事も父上母様と フシ いうて。くれよと泣き給へば。いや御歎きは同じ事。髪を下して姫君様御菩提をとばかりにて。フシ夫婦主従すがり付き。スヱテ聲も。惜まず泣き給ふ フシ物の。あはれの至極なり。地かかる所に常陸之介平の安盛。公用によつて高房卿御夫婦の。内意を得んと案内す。忌の内にも公用ならば先づ此方へと請ぜらる。安盛やがて對面し。詞今度は不慮の御仕合言語を絶し候。それにつき忝くも帝には。弘徽殿の御歎きに又三の君まで失せ給ふ。いやましの御愁歎浮世の無常を思召し。十善帝位を振捨て先月廿二日の夜。貞觀殿の小門より王宮を忍び出で。山科の花山寺にて。世を捨人の御有様花山の法皇と申し奉る。されども御息女の事猶忘れさせ給はず。右近と申す腰元御息女と同年にて恰好も似たる由叡聞に達し。三の君と思召し御座近く召されたし。詞貴方猶子として上げられよとの。院宣なりと述べければ夫婦あつと頭をさげ。詞有難や冥加なや今も今此の者を。娘が形見我が子にせんと申し慰む折柄。地何か違背申すべき歎きの中の悦びと。泣く〱お請け申さるゝ安盛悦び。早速の御承引我等迄の大慶たり。詞扨右近に申し含むるは。君は今に弘徽殿の事のみにて外へ御心移らねば。御身をお寢間へ召す事は難かるべし。随分弘徽殿を悪しざまに云ひなし。三の君を失ひしも。嫉妬の恨に弘徽殿の死靈のわざ。夢に見ゆる目に見ゆると恐ろしさうに申されよ。時には君も愛想盡き弘徽殿を思ひ切り。御身の腹に若宮の御誕生もある時は。地其の身は則ち准三后高房卿も任槐あり。此の安盛も鎮守府の將軍。第一君の御爲方便の僞りは。罪にあらずと佛さへ虚妄の御法を説き給ふ。世間忍びの山家の御所ひそかに迎へ申すべし。悲しき跡は悦びあり各の末繁昌と。後先しめて辯舌を。飾る詞の花の山花山の。院へと 三重

へ分入りし（以上一本ナシ）

フシ雲井の月も。山樵の。軒端に霎る御住居。松の柴垣竹の簀戸 スヱテ錦の褥引きかへて。苅穂の庵の草席。主殿司の菖蒲草オクリ葺かねど。へ軒に生ひ茂り。主水司のフシ初氷。佛の閼伽と。碎かれて。地曉の雁夜の鹿。いづれ哀れのたねならぬ西の一間は御佛殿。弘徽殿の繪像をかけ。中尊は釋迦牟尼佛佛も我も十九歳。それは衆生濟度の道。是は戀路の闇に入り。なほ三界を フシ出でやらず。地佛は心穢しとさぞ見給はん恥かしと。懺悔に絞る花衣 フシ苦の。袂と朽ちにけり 地参り仕ふる者とては中納言義懐。左中辨惟成ならで下部の一人も置かれねば。二人水汲み朝菜摘み。名聞はなれし御遁世 フシ

戀故とこそ哀なれ。地義懐惟成御前に出で。詞内々平の安盛申し上げし。高房が召使右近と申す腰元。三の君に似たるよし則ち高房猶子となし。御徒然をいさめん爲。安盛今宵御庵室へ密に伴ひ申さん由申し越し候。地若き女の男の中。女の連も候はでは初々しくも頑固にて。却つて不興と存ずれば。京の御所より女孺かお末か一兩人。呼び候はんと申し上ぐれば。いやとよ王位を振捨て内裏を出でて世を遁れ。左様の昔づれ都の誹り世にうるさし。右近とやらんが伴ひには。詞此の山科の里人土民の妻子賤の女にても。密に語らひ何方へも漏れぬやうにと宣へば。地ア、誰をがな雇はんと二人談合とりどりの。折に折焚く柴つけ馬オクリあの山。へ越えて。ギン此の山樵がオクリ八瀬や。大原木黒木束木。フシ柴召されとぞ賣りにける。詞惟成見付けてなう義懐。あれは御所へ柴入る、朧の清水のお嫁でないか。地何と今宵あの者を頼むまいか。是は幸ひ柴賈はん柴賈はうと呼入るれば。あいと答へて内に入り不思議さうに顔を眺め。詞是はく見たやうなと思うたが。京の御所で再々見たお公卿様達ぢやはにや。誠に聞けば上様も内裏をお出なされて。お位は宮様へ參つたと申すが此處に隱れて御座りますか。地何くらからぬ王様の宮殿樓閣打捨てて。わしらが住居同然に御内の樂も無さゝうな。是はまづどうしたいはれお借錢かなあつてゞあろ。不自由を推量しておいとしさまや勿體なや。親祖父代々お清所へ柴入れた冥加の爲。薪は嫁が續けませう。なんぼお位高うても借錢には勝たれぬ。本の位倒れぢやと フシ涙を流すぞ殊勝なる。詞義懐惟成打笑ひいやく左様の事ではなし。あれに御座なさるゝこそ今迄の帝樣。御髮を切らせ給ふ故花山の法皇と申し奉る。其の方が心ざし叡感なりとありければ。地アヽ有難やと手を合せ其のえいかんとは私が舅。九十六の錢百で一昨年死なれ。戒名は清容永久と。語れば君も堪へかねて フシどつと笑はせ給ひけり。詞兩人重ねて。今宵君の御慰めに女中一人參らるゝ。御祝言の倣びしたけれども我々は男勝手知らず。待上臈も何もかも。萬事そちを頼むとあれば。アアつがもない。内裏様の嫁入とは五緒車の御入内。一度拜んだばつかり作法は夢にも知らぬはにや。いやく左様の儀式でなし。此の住居の事なれば祝うてざつと形ばかり。其の方達が嫁入と同然に入用の物整へて。地御挨拶も申してくれ平にくと頼まるれば。それならば易い事八瀬や大原の嫁入は。大抵祭同然酒は濁酒の手造り。高野川の鮎の鮨干鮃のむしり物。芋と蒟蒻煮しめて三種の肴が入りまする。詞落付きはお雜煮餅は大方一人前。三升あてに搗いたれば 地大概に行渡る。冬なればさつぱりと洗濯夜着も入るけれど。暑い時分はこれが德靑柴一把ふすべれば。蚊帳つらずの新枕閨の内は其の身の氣轉。私等が若い時分は祕密口傳

も入つたれども。詞山家の奥の奥までも今の娘は一人食み。五日歸りする迄は朝晩のかき膾。地お汁には何なりと尾鰭のついた燒物。尤も飯は上置なしのフシ生飯なりと云ひければ。地扨も目なれず聞きなれぬ侘ひたる賤が物語。聞くも山家の珍しさとフシ叡感限りなかりけり。詞はや安祥寺の入相の音羽の峰に夕づく日。傾く笠の女姿平の安盛同道にて。御庵室に伺候し詞かねぐ〱奏せし中納言高房が養子。右近の前御宮仕と奏すれば。地義懐惟成出迎ひ能くぞ能くぞ此方へと。笠を取らせ引き繕ひ。玉座に近付け安盛もフシ同じく御前に伴はる。地安盛憚る所なく。詞三の君の身の果餘り本意なく。せめての所緣と此の女を御宮仕に奉る。叡慮にもかなひなば。御恩賞には鎭守府の將軍職ひとへに願ひ奉る。これ右近の前。日頃怖や恐ろしやとおぢ恐れたる夢物語。御咄し申し上げ弘徽殿に負けまじと。隨分お氣に入り給へ後程御機嫌伺はんと。御前を退出しフシ旅宿へこそは歸りけれ。地右近は幼き時よりも公家奉公には馴れたれども。王位に押され身もふるはれ顏に紅葉の秋津君。共に御心耻かしくスヱテ御詞もあらざれば。義懐惟成氣の毒がりサアこゝらが男の困り物。お嫁どうぞ御挨拶萬事は頼うだ任せたぞ。我々は花山寺の和尚の方へ外すぞと。表へ出づればヲヽそれそれ跡は私が請取つた。先づは閨のお盃酒買うて來ませう。こんな時には兎角酒。酒は情の露雫フシ德利さけて出でにけり。地右近はなほもさし俯向き。君も何を打付けに云ひかけ給はん詞もなく。詞盆にはさぞ踊りつらん。踊が好きな地顏つきぢや。京と違うて踊もなき。此の山里の淋しさはフシ住みうからんと宣へば。詞いえ〱物靜なお住居。地御殊勝な佛樣。私は是が好き此方なは釋迦樣。彼の繪像の佛はなんと申す佛やら。悋氣深いいたづらさうな佛樣ぢやと云ひければ。詞ヲヽあれこそ鷹が涙の種。弘徽殿が面影よ。地位も身をも捨てたれど契は思ひ捨てられず。回向をなしてくれよとてスヱテ御涙にぞくれ給ふ。地右近も哀れを催せしが。ヤ忘れたり安盛の。云ひ敎へこゝの事ぞと思ひ出し。詞ヤア弘徽殿の御影か。地なう恐ろしや悽じや夢幻に見たとは違ひ。顏ばせは美しく魂は蛇身。見るも怖やと逃げ惑ふ法皇驚き。こは何事ぞ仔細を申せと宣へば。詞さればこそ此の間ある時は夢に見え。又幻に現れ弘徽殿が怨靈なり。汝君へ召さるゝ嫉ましゝ腹立や。三の君を取殺しあら嬉しやと思ひしに。おのれが枕を並べんとや思ひもよらず叶ふまじ。君に近付く女あらば取殺し〱。日本國の女の種枯野となして絶やさんと。鬼とも蛇とも譬へなく追廻さるゝ其の苦しさ。身につまされておいとしや三の君の御最期まで思へば御主の敵ぞと。安盛が敎の通りフシ違ひなく〱語りける。地法皇誠と思召し大きに驚き逆鱗あり。存生にては嫉みな

く賢女貞女と作りなし。臨終にも異女に思ひ忘れて慰めと。よく〳〵僞りし。戀も思ひもさめ果てたり釋迦牟尼佛も聞き給へ。三世の契り是まで世々永劫の勘當ぞと。繪像を取つて投げ給ひ。是につけても二の君が最期の心不便やな。形見には右近の前。閨へ來れと打萎れ フシ入御なるこそは是非なけれ。地右近繪像を取上げ。佛壇に掛け置きて。さりとては情なやお爲になるとありし故。教の通りは申せしが死したる人になき名負うせ。我が詞一つにて緣を切らせ勅勘ある。恨をゆるし給へとてスヱテ涙を流し詫びけるが。地コハリ不思議や繪像ゆるぎ出で身の毛もぞつと忽に。地絹を放れ形を現じ右近とやらんたしかに聞け。地生身の冤罪も辛からずや科なき屍に勅勘うけ。冤罪に妹脊の中絕えし思ひを思ひ知れやとて。懷に飛入ると思へばうんと魂切りて。我ならなくに我が心スヱテ弘徽殿と入替り。姿は右近の橘の昔の契りは忘れじもの。彼の驪山宮長生殿のさゞめごとも。君と我が中にあら。〳〵。あらがねの七重の鎖は切る丶とも。緣は切らじと手を伸し引けば。ひかる丶御切髮。亂れ引かれてよろ〳〵よろ〳〵よろぼひ柳氣力なく。風に揉まる丶御有樣。天に引つ立て地に引つ据ゑ。君が心は飛鳥川 フシ我は三途の波枕。地朽つる世迄は朽ちせじと。三界六道つきめぐる足弱車くる〳〵〳〵 ハツミフシ苦しみ。給ふぞ哀なる。地大原のお嫁はかくとも知らず。酒を求めて歸りしが法皇右近は亂れ髮。つかみ合ひ給ふ體こりやなんぞ。詞はや夫婦いさかひか。今からそんな身持で此の憂世帶は持たれまい。王樣も王樣ぢや。內裏の格が此處へはむかぬ向ひ隣の聞えもある。地男は裸百官の上に立てば女御樣。今で申さばおか樣ぞや。夫婦いさかひ世帶の毒。フシア丶おとましやと云ひければ。地とかく右近は狂氣ぞやよく計らへとの仰せにて。奥へ入らんとし給へば。何處へ〳〵と玉體を。引廻し引伏せて。なう狂氣とは世にある人。我は形も夏草の。螢に焦る丶螢火の。聲を立てねばそれぞとも岩に堰かる丶 地岩間水。二つにさつと打ちわれて。波に碎かば碎けよとスヱテさめ〴〵と泣きければ。詞是おか樣なんぢや割つての碎いての。二つにも三つにも鍋釜は此方の。割れても私は構はぬが。世帶の毒とはそこの事。擂木一本害片し只では出來ぬ錢が入る。但しあの王樣の細工に見事あそばすか。たとへそれでも勿體ない。地王樣の擂木は フシ握らりやせまいと喚きける。地いや愚かなり戀路には。王位とても隔なし。現世の位は未來の仇。心に思ひ身に忍び口に戀しと焦る丶も。身口意業の三業の其の三業を知らずやと。縋り付けばなう悲しや。詞三業とは小糠のことか。小糠三合持つたらば入聟すなとは男のこと。地是は女の一念の。其の玉葛這ひまつはりて這ひかゝり。コハリ遁れ難なや遁さじと寄りては放れ放れては。又引

寄する戀慕の綱くるし。苦しと 地 夕闇の。そら恐ろしく賤の女も。惱み伏せば玉體もつかれ轉ばせ給ひしを。猶も放れぬ恨みの涙 フシ 凄じかりける次第なり。地 義懐惟成此の音に何事やらんと馳付けて。抱き起し參らせ是は〳〵とばかりにて。驚き騷ぐ其の處へ頼光の代官として渡邊の綱。安倍の晴明誘引し逸散に馳け來り。詞 今夜晴明天文を考へ候へば。讓位の帝死靈の惱す天變ありと奏聞し。攝政兼家公の仰によつて。則ち晴明召具し候。頼光は禁裏守護に候故。渡邊を以て言上とこま〴〵とぞ述べにける。地 法皇叡感斜ならず。とく〳〵加持し申せとの院宣。晴明右近に近付き六甲・六丁の祕文を唱へ。天津金木天津菅麻を。千座の置戸に置足らはして。祓ひ申し淨め申せば忽ち顛ひ口走り。我こそ弘徽殿の亡き魂よ。君に恨はなけれども平の安盛。將軍職を望まん爲右近に數へて寃罪を云ひかけ。三の君の命も我取たると奏せしは。跡かたもなき僞り三の君は丹波の國。大江山酒呑童子といふ鬼神の所爲。疑はれて勅勘ゆるし契をたがへ給ふな。さらば〳〵と云ふ聲に靈化は失せてさめければ。女御の姿ありありと フシ もとの。繪像にうつりけり。地 右近夢の心地にて安盛が詞のたくみ。言上すれば死靈の告一言一句違ひなし。皆安盛が惡逆と逆鱗殊に甚しく。今宵當所に宿する由搜し出して搦め取り。頼光が心に任せ計らふべしとの。院宣も終らぬに平の安盛參上し。詞 右近の前は叡慮に適ひ候か。伺の爲參りしと 地 云はせも果てず渡邊。院宣なるぞと胸板をかつぱと踏付け。乘りかゝり繩をかくればこはいかに。詞 忠節勵む安盛を搦めよとの院宣は。心得がたしと立上るいや科は云ふに及ばず。おのれが心に覺えあり。言譯あらば頼光の御前にて申すべしと。地 面骨を五つ六つ續け打ちに打ち付け。それ〳〵と引立つるなほ〳〵玉體安全の。御祈禱を晴明が千早振てふ祝詞の聲。君は女御追善の御經の聲打交り宛然。神も影向し佛も來迎あるばかり。佛法王法神道も。共にさかりの花の山今に。古跡ぞ殘りける。

第三 東寺の西口茨木がつかむ八百兩の金札

詞 戀と呼ばずと。行かずに置こか。君が見たさの フシ 鏡山。地 ひらぎの長が土藏作風にも散らず日に枯れぬ。黄金花咲く松と梅。百に餘りて園端。二百餘人の玉葛。夕々に產み出だすてゝなし金の攫み取り。茨木童子と名に高く。母屋は總領太四郎が。揚屋女郎屋親子して。鋸商金銀は フシ 鋸屑と溜りける。地 爰に加藤氏綱といふ浪人あり。身にも譽持ちながら、未だ時にも栗田口浮世を忍ぶ柴の戸に。去んぬる彌生やすらひ花。一人娘を見失ひ足手限りに身を碎き。尋ね廻れど影も見ぬ フシ 鏡の宿にぞ着きにける。地 見なれぬ里の賑しさ。行きかふ女郎の年恰好同じ程なを見るにつけ。若し此の里には居ぬ事かと尋ぬるも面伏。聞かね

ば心落着かず揩り進ひすれ縺れ。一つ所を行き戻り案じ佇みゐる所へ。北向のつまがはが袖を控へてこれ君さん。詞旅のお人か近付もなささうな。局へごんせしつぼりと知る人になりんしよ。ヲヽ適分々々客にもならうが。先づ密に尋ねたい事があると。言はせもあへず尋ねたい事合點ぢや。私が位かゑ。極つた通り五分でごんす。安い物ぢや這入らんせ。イヤそんな事ではない。此の廓に居る禿子供の親里所は知つてかや。ムヽ〱私や禿使うた事は無し。女郎のさもしいそんな事何の知ろ。まあ這入らんせと引止め。此の三十日客せねば賣物で無いやうな。味な所があるぞゑ。地まあフシござんせと引留むる。いや先づ重ねて重ねてとむしやぶり付くを挽ぎ放し。鬼一口を遁れし心。目を塞ぎ鼻抓みヲクリひらぎへ屋へこそ入りにける。地内には見馴れぬ風俗の。胡散らしげな大小に流石袖にもあしらはず。亭主太四郎揉み手をして。詞誰方かは見馴れぬお人。我等はひらぎ屋の太四郎と申す者御用は如何と言ひければ。拙者は京都浪人者。一生に傾城と物申した事ござらねば。揚屋衆に近付なし閻魔の廰の訴に。たつた一夜太夫といふ者買うて見たし。路銀の餘り一兩二分是を貴殿に渡し申す。然るべきやうに賴み入ると述べければ。太四郎手を打ち扨打明けた仰しやれやう。それが結句野暮の粋女郎にお望みは御座らぬか。いかな〱。太夫でさへあれば誰でも構はぬ。申し。女郎と申すは面々に間夫と申す戀がある故。夫への心中大方初手は振りまする。其の手管でお目を偸む事もあり。左樣の時に得手のお方が今宵一夜は俺が物。一寸側を放さぬと堅くろしいお方が御座ります。そんな事も御料簡なされますか。構はぬ〱。振りたくば振らつしやれ。神樂の鈴程振らつしやれ。只氣立の能いびかしやかせぬ太夫を賴む。太四郎悅びこりや女子ども。俵屋へ往てせんよ樣呼んで來い。盃持て來い。小座敷の炬燵へ火を入れい先づ此方へと奥座敷。地私は隱居へちよつと見舞うて後方お目にかゝりましよと。雪踏も足の横町のフシこそ〱宿へぞ走り行く。地ひらぎ屋よりと聞く嬉しさせんよは心たぐり行く。地手禿も後からと。引舟入らず走り込み客の事も問はばこそ。詞これ龜殿。太四郎さんは何處へぞ私が來ると知つてかや。ヲヽ〱成る程〱旦那樣の御合點。障りないお客さん。お座敷は中の間へ。地せんよさんお出でと引合せ。位のある松の床柱。とんともたれて寄添ひの無い事有る事しやら聲に。上する女子の取りフシ踊も打ちたき風情なり。龜が勝手へ立つを見て加藤兵衛居直り。詞先づ以て今日はお出で忝い。我等太夫樣方を呼びまする風體な者でなく。身は都に住みながら。女郎達とは詞を交せし事もなし。況して此の廓の誰方が誰方とも名も存ぜず。亭主太四郎

とやらが心得を以て。不思議にお目にかゝる事返す〴〵も忝し。一見と申し武骨者。なれ〳〵しき事ながら盲蛇に怖ぢずとやら身に迫つての物語。我等が兄弟より親しき者。當春十五の一人娘三月より行き方知れず。地狐狸の所爲かと夜な〳〵の太鼓鉦。人買人賣の手にも渡りしかと。京都伏見の遊女町。山々谷々捜しても今日迄行き方知れず。詞殊に母も無き者父の歎き御推量。死したるに極らばせめて身體なりともと親は狂氣の如くに成る。子が存らへ在るならば親の悲しむ一倍と。地親子の心思ひやり我等が身同然に。斯様に尋ね申すなり。禿子供に思ひ當りの方あらば。お尋ねも申し度く扨こそ氣立の能きお女郎とは望みしぞや。詞色もなく戀もなく。大事の女郎に立入りし御物語。さぞ譯知らずと思されん。地是も心のやる方なさ。不調法は御免なれとフシはら〳〵泣いて語りける。地せんよは鼻紙手に取つて。ナウ始めてのお客に。泣いたは是がフシ始めぞや。地ちつと違ふか違はぬか。女郎の成立は皆それに似たる事。親御の歎き御懇の中ならば。さこそと思ひやられて。私が昔も今更に袂を絞るばかりぞや。詞此の廓の女郎屋私が親方始めとして。禿ども多いと申して廿人か三十人。地肝煎口合ある内に。親許慥の判を取り。吟味に吟味が廓の作法。此の太四郎様の母屋は。詞ひらぎ星の長とて隠れもない大忘八。太夫ばかりが五十人天職が七十餘人。圍の端のと二百人に餘つて。禿どもさへ百人餘事の多い中なれば。地どの筋からどうこけて。お尋ねの娘御のござるまいとも申されず。アヽどうぞ知らせて上げたやとスエテしみ〴〵泣いてぞ語りける。地表口から急がしげに走つて來る禿の聲。俵屋のせんよ様は奥にかえと。つゝと通つて鼻紙の中から出す延の文。コレ太四郎様の。お前へ進ぜとおしやんすと。文を渡せば讀む隙も呷けば呷いて。頷き合ひし横顔を。よく見れば尋ぬる我が子の横笛。はつと嬉しさ抱付くばかり。親は爰にと言はんとすれども人目あり。人の思ひ我が思ひ。汲みかへ〳〵心の水フシわくせきするぞ道理なる。地せんよが心は戀一筋。脇の顔には目もつかず。ちよつと往て來ませうと。文引つ裂いてせゝくしやの小褄ほら〳〵立出づれば。共に跡をも振返らず。連立ち急ぐ我が子の振。詞コレ禿来々々。ちよつと此處へ借りませう。地あいと見返りヤア父様かいの。アヽ高い〳〵。可愛の者や。ゆかしう御座るとばかりにて。抱付けば引寄せて。聲を呑んだる濕り泣き親子の。様ぞ哀れなる。詞加藤兵衛涙を押へ。春より今日が日迄。尋ね餘つて最早此の世に無いものと。思ひ極し上ながら若しやと此處へ來りしに思ひも寄らぬ此の體。何としてあさましい。君傾城に使はるゝ禿とは誰がなしたるぞ。如何なる者に騙されしぞ。地不便の者の有様やとスエテ聲打ち。しをれ言ひければ。詞

と丶樣に歎きをかけ。我が身も憂き目見る事は私が心の愚さゆゑ。過ぎし彌生やすらひ花の歸るさ。白髪頭に赤ら顏浪人らしき親爺めが。ヤア。加藤兵衛が娘か。小い時に逢うたれば定めて其方は覺えまい。扨も〳〵成人加藤殿へも無沙汰した。長の浪人笑止な。其方を賴光樣の御臺所へ御奉公に出さう。親の立身身の出世たつた今加藤殿とも談合し。お主を迄迎ひに來た。ちよつと逢はする人ありと騙すとは夢にも知らず。地とつ樣の合點ならどうなりともと連立つて。舟に乘せ駕籠に乘せ。此處ひらぎの長へ連れて來て。五十貫とやらに私が一期を賣り渡す。ヤア其の筈でないさうでないと泣いても喚いても聞入れず。長が手に渡りしより。間がな隙がな逃げて退けう。走つてくれうと心がける素振を見て。慳貪邪見な親方が五十貫に買うて。詞一萬兩にもするやつぢや。其の根性を直さぬかと。地縛つて長押に吊下げらるゝ時もあり。詞杜

を横に渡して。足に石を括り付け木馬とやらに乘せられ。地夏の夜は裸にして。植込に括り付け蚊に責めらるゝ時もあり。食を止められ撲ち敲きは常の事。詞泉水へ身を投げて死なうかと思へども。せめてとゝ樣に此處に居ると知らせたく。不繁昌な女郎衆はわし同然の責め呵み。木蔭へ寄つては兎角命が大事ぢや。地獄へ墮ちたと思やと傍輩衆の情にて。地一日々々暮せしが抓りたゝかれ小刀針。身内に明所はござらぬと。語る子よりも聞く親の。心に釘針刺す如く共に。歎き沈みしが。詞エヽ憎い奴輩しやつ人商人。其の親爺めが名所は聞かなんんだか。手形の時見ましたが。北白河の廣文といふ奴ぢやげな。ムヽなに北白河の廣文とや。地名所さへ聞いたれば政道明らけき賴光へ訴へ。其の廣文め獄門にかけ。其方は廓を易々と取出すは今の事。詞さり乍ら其の間にも必ず〳〵。一夜でも遊女の勤して身を穢せば。地重ねて武士の妻とならず。

一生の大事ぞと語れば横笛又泣き出し。サア詞それが悲しうござんする。かゝ樣の御臨終に貞女兩夫に見えずとて。夫一人の外とては男に手をも取らさぬもの。女の大事は是一つとくれ〴〵の御遺言。胸の守りに懸けてゐる。さりながら近い内格子へ出す。太夫にするとの用意を聞けば。責に逢ふより悲しうて死なうと思ひ詰めましたに。今お目にかゝれば心に力賴みもあり。片時も早う取返して下され。ヲヽ氣遣するな今の事。地それ迄は親の名も人に語るな漏すなと。言へども漏るゝ親子の涙フシ止め兼ねて居る所へ。地遣手の鍋が藥罐聲。煮え返つたる顏付して。此方のしんべは爰らへは見えぬかと。奧へ通つてこりや爰にぢや。詞はや今からのらかはくか。わが身が爰へおぢやつて。もう背丈が伸びたとて。一日も太夫樣がたに付きもせず。供はしやらず。眠たいめはしやらず。朝晩仕事は研ぎ磨き。もう半年もゐやれば。アノ氣立な旦那樣の

手並を忘りやつたか。又しては遣手がぬるい〱と 地 棒の側杖喰ひさうな。なにのらかはいて爰にゐるヱヽ因果めと フシ 拊りこかす。詞 おりや遊びにや來ませぬ。太四郎樣からせんよ樣へ文持つて來ました。それそれが木馬の元。若旦那の太四郎樣には。京からござつたおゆら樣といふ。歴としたお内儀があるぞや。コレ此の眼に見えぬか。せんよ樣と若旦那のこそ〱ゆゑ。おゆら樣とのもや〱が此の耳へ入らぬか。内の紛擾が面白いか。地 惡魔めとてははたと打ち天狗めとては突伏せ。下がへに手を入れて太股を。捻上げ〱捻上ぐれども聲立てず。痛さを堪ゆる憂き涙疊に落ちてはら〱と。スヱテ 齒ぎしみしても加藤兵衛出づるにも出でられず。言へば言ひ負け武士の娘を下司女に。見す〱親の見る前で呵まする無念やな。飛びかゝつてや突通さん眞二つにや斬殺さんと。刀に手をばかけたれども。詞 斬つて誰がため遣手には科もなし。

地 腹立つる程我が子のひしと。せき立つ心押鎭め。詞 チヽ遣手衆憎いは道理々々。地 其方は娘は持たずかと聲を涙に曇らせて フシ 見ぬ顔するぞ哀れなる。詞 こりや。客樣達の手前もちと恥かしいと思へ。其の放任な根性で今から多くの殿達に。しつぽり〱やらるゝか。地 とつとと往せうと引立つれば。詞 申しお客樣。餘所の娘が折檻に逢ひをる。不便な者やと苦に持つて下んすな。わしや痛うも 地 無いぞやと。笑顔にかゝるはら〱涙 フシ 追立てられてぞ歸りける。地 加藤見送り立ちつ居つ跡に焦るゝ親心。サア〱在所は知れた頼光の御前への訴は。上り下りも日數を取る。今宵一夜も見捨てては親も命がたまらぬ。詞 親方ひらぎの長と太四郎とは親子とや珍重々々。長が邪見無得心の者なりとも。鬼でもあらず畜類にもあらず。彼奴も子を持つたれば親子の哀れは知るべきぞ。某が大地に手をつき頭を下げ。膝を折つて口説くならば。地 指いたる我が大小の義理にも迫つて。聞分けぬ事よもあるまじと。亭主が歸るを松茂る フシ 小庭に佇みゐたりける。地 間夫の後妻打つ波の。おゆらは夫太四郎がこづか胸ぐら摑み合ひ。敷居で轉ぶ雪踏は飛ぶ。引摺り込んで上り口。どうと打付けこれ太四郎殿。詞 せんよ殿とのもや〱知り拔いて居るぞや。今日も今日此方が門を出て行くと。せんよ殿を呼びにくるヤァ合點ぢやと。裏の路次からそつと出て。こそ〱宿へしかけて一から十迄見屆けた。此方衆親子の商賣は何ぞいの。女郎屋と揚屋と。内の女郎と餘所の揚屋と間夫したら。此方衆親子がきよろりと見てはゐまいがの。まつ其の如く。餘所の大事の立物の太夫と。揚屋の身で間夫狂ひ。廓にぱつと沙汰あれば第一商賣の妨。女房がうつけぢやとゆらが鼻毛がよまるゝわいの。今ばかりいふぢやない。何ぞいへば氣の通らぬ悋氣かと一口にいひこめ。なんと。粋は悋氣せぬのもとの何處か

らの法度ぞ。誰方からの極めぞ。サア地言やく〳〵とむしやぶり付けば取つて突退け。胴骨を踏付け〳〵。己れがどこへ女房呼ばはり。詞其の腹持つても女房か。七月の京土產。既に此の太四郎に。男の一分捨てさせうとしたな。女房でない出てうせう。去狀が望みなら千枚でも書いてやろ。地男ども女ども引ずり出せとひしめけば。家內騷ぎ立ち先づ親旦那呼んで來い。座敷へ聞ゆる門に人がたかります。アヽフシうとましやと騷ぎける。詞ゆらけら〳〵と打笑ひ。ハア改つた事ばかり。此のお腹が今見えたか。わしも京にわけ有つて。此の處へは下るまいと言ひ切つてゐたれども。此方の親御が。懷妊大事ない。其の子は太四郎が子にして俺が孫に極める。茶屋揚屋の嫁にそこらは構はぬ是非に於て貰はうと。とつ樣との固めで嫁入つて來た私なれば。此の腹な子は此方の子。地親旦那と三つ鐵輪でけんほくほはれで產んで見しよ。人の浮名立たうより此方の浮名嗜ましやれ。詞イヤ此奴嘘つきめ。女房旱魃はゆくまいし己ればつかりが女か。此の澤山な女子に。懷胎な合點ぢや嫁に取らうといふ。阿房な親がどこにあろ。地大恥かゝぬ中出て往せう。さなくば取つて引摺り出すと小腕取つて引立つる。門口より親長は默れ〳〵喧しい。詞太四郎だまれ。ゆらもだまれ。こりや。せんよに勤めをさするによつて間夫のなんのと喧しい。とんと請出して本妻にせい。町の分限者どものする程の事此の長が仕兼うか。とうに內證聞いて置いた。八百兩では今でも埒の明くやうに。俵屋と談合しめて置いた。コリヤゆら。汝が親と言ひ交した言葉一言も違へぬ。京の東では住吉屋のゆらというては名を取つた娘ぢや。アヽどうそこつちの格子へ出したれば。大儲するものぢやと。見込んで親へ貰ひかけたれば女郎には賣りませぬ。殊に大盡の子を懷妊してゐるというて埒が明かぬ。そこで此の長が思案を以て。拵へにも懷妊にも構はぬと。一杯くはせ先づ嫁に貰うて。跡では其の腹な子を瑕にして勤させうと。此の長が胸一つでかうからくんだ。さうなうて六貫匁といふ禮銀を。何の價に出さうぞやい。此のやうな手練をせねば分限者にはなられぬ。これが俺が商賣ぢや。其の腹な子を下せ。今宵から此方へ來いといへばゆらは返事なく。スヱテ只伏沈み泣きゐたる。太四郎聞きかね進み出で。詞せんよを請出し下さるゝ御恩は海山有難し。ゆらめに勤させうとは。それで此の太四郎が若い者の一分何と立たうと思召す。歷々のお付合京都迄も聞えた。ひらぎ屋長は嫁に勤をさするわ。息子太四郎は女房に流れを立てさすと。惡名を立てられうより。同じ恥をかく手間で妊婦をかづいた方が遙にまし。地ゆらめに卒產致させ私の子と致し。お前の言葉も立てませう其の上で何事なう。親へ戻して下されと。いはせもあへずヤァ氣の弱い。詞彼

奴を親へ戻して。せんよを受出す八百兩は何處から出る。總じて惨い目を見まいと物の哀れを知つたり。人の恐れ世の中の。義理順義を知るが最期貧乏神が乘移る。此の春抱へた廣文が口入れのしんべも。明暮ほえ廻れども叩き込み責め伏せて。五十貫をやがて五千兩にして見せう。コリヤ此のゆらも前出した六貫匁。せんよ請出す八百兩五層倍にせにや置かぬ。地男ども。ゆらをこつちへ連れて來いと。立たんとすれば太四郎止めて今暫く。詞申し親父樣。ゆら一人がなければとてお前が貧乏なさるゝか。たとへあれゆゑ金銀の山を築けばとて。太四郎樣の内儀といはせた者に道中させ。私は生きて得居ませぬ。子を産まして波風立てず去るに何の手はつかぬ。地明日より此の太四郎に人交りをするなとか。御料簡頼み奉るとスヱテ手を合せ詫びければ。ゆらも只御恩には。京へいなして下されと泣くより。外の事ぞなき。地我が子の恥を聞入れてそんならどうなりと。詞墮胎なりと産ませなりと埒明けて京へいなせ。今宵の中に俵屋と通屈して。せんよを明日から呼び取り。此の八百兩の戻る程餘の女郎どもを地せつちやうせいと。酒呑童子も其所退けの。茨木童子がつかみ面フシ片腕切りたきばかりなり。地加藤兵衛聞けば聞く程力落ち。ムヽあの心では泣いても口説いても聞入れはよもあるまじ。なまなか言出し仕損じては後日も如何。兎角頼光へ訴へ御威光でなくんばと。思ひ定めて座敷を立ち。詞これ御亭主。勝手も殊の外取込みと見受けたり。我等も今日守山迄參る用事ゆゑ。地お暇申すと笠おつ取り。重ねてお出といふ聲もフシ聞捨てゝこそ出でにけれ。地長跡を見送つて。詞あのやうな奴客にすな。何の二つや三つ宿をしたとて塵埃。こやかましい置いたがよい。アヽもう行なう。コリヤどいつぞ來い。猿め。先へ行て善哉餅言ひつけよ。小豆は舌に觸る。京の龜屋が羊羹をすりつぶしてせいといへ。地太四郎も來いと立出づる。今の榮華は喜見城。女郎の爲には恐しき鬼が。城へと三重へ歸りけり。地東宮懷仁親王七歳にて御位に卽かせ給ひ。攝政兼家朝政を正し。武將源の頼光非常を警め給ひしかば。聖の御代の九重や民の訴なかりしが。永延二年の頃よりも訴訟沙汰人日日に增し。頼光の門前は夜の中より群集して。フシ御門の明くをぞ待ちゐたる。地夜も明け行けば頼光決斷所に出で給ひ。季武貞光執筆の役檢非違使左右に着座して。庭に隨兵兵具を携へ御門開けば訴訟人。我先にと込み入りしを貞光進んで。詞ヤア騷がし〱。御批判は後程名を指して召出さん。先づ面々が訴訟の品を帳につけ。それ鎭めよ。地承ると隨兵鐵鞭振廻せば。しいと鎭まり蹲ひてスヱテ皆々帳にぞ付けにける。詞恐れながら私は。上京西陣織殿屋の孫三郎と申す者。十七になる年季の織手。一昨日の暮方より行方知れず失せ候。親請人に尋

ぬれば却つて此方を恨み口。御威光を以て御穿鑿仰ぎ願ひ奉る。地故郷は錦の小路の者と口上の趣をフシ貞光帳にぞ留めにける。詞我等は二條室町絲商の吉次と申す者にて候。一人の悴に一門中より嫁を取り。里歸りの道にて見失ひしと申して。今に戻さず候へば御詮議願ひ奉る。地我等が爲には姉が小路の針屋。從弟同士と繰返せばフシ同じく帳にぞ留めてけり。地次に年頃六十餘りの女房は。柳の馬場のあこうと申し綿つみ致へる寺子とり。十二と三になる弟子が二日に二人の行方知れず。お慈悲に御詮議給はれかし人の小娘失ひて。未來のつみ綿親々の恨みはさながら眞綿にて。首締めらるゝの思ひなりとフシ涙を流して訴へける。地私は宇治の里梅田と申す茶師にて候。十八歳の娘閨の内にて姿なし。側に臥したる下女に問へばこちや知らぬと申すなり。細かに詮議下さるべしとぞ願ひける。私は今熊野貞月と申す比丘尼のお寮。廿三四の弟子二人勧進に出で今日七日。今に歸らぬ御訴訟則ち其の比丘尼の名。一人は貞林一人は又フシ貞觀々々とぞ申しける。地是は深草土器師明けて十四の小娘。何者の仕業にや首も腕も引拔いて。腰より下は殘れども骨は砕けて候と。泣きこがれて申すもあり音羽山の燒物師。女房が頭の鉢打割られしといふもあり。油の小路の傘屋が女房武者の小路の具足屋の母。御室の糀屋吉田には八百萬屋。御幸町の稚兒醫者六條の豆腐屋。七條の袈裟屋狼谷の衣屋。櫛笥通の紙漉押小路の鮨屋。三條の取上婆娘を失ひ妻を奪はれ。叔母は姪を尋ぬれば妹は姉を見失ふ。兎にも角にも御詮議あり妻の行方を知らせてたべ。娘に逢せて給はれなう御慈悲なるわと聲々に。泣き悲しむ有樣は闇魔の廳に罪人の。罪を悔むもかくやらんフシ目も當てられぬ次第なり。賴光も落涙あり此の頃の訴訟人。爭論出入の事は無く妻子を失ふ訴へ。春より帳面八百人に及べり。詞ヤア汝等。是は丹州大江山酒呑童子が所爲なる由。弘徽殿の告によつて某討手を蒙れども。幼主御卽位大内守護にて延引せり。近々に大江山に分け入り。生きたる者は連れ歸らん。死したる者は敵を取つて得さすべきぞ。目に見えぬ變化なりとも。源氏の威光弓箭の德滅さであるべきか。地靜謐の御代となし追付け歎きを止むべし。罷り立てと仰せければアヽ有難やと一同に。わつと叫びし其の聲はオクリ大路に〳〵響き哀れなり。地爰に四十ばかりの男子勾欄の下につつと出で。詞某は粟田口の貧者加藤兵衞と申す者。横笛と申す十五歳の我が娘。當春賀茂のやすらひに參りそれより今に行方知れず。度々訴訟申せども變化の業とて追歸さる。これ御吟味の暗き所。變化流行を幸に人商人の蔓り候。此の御心付かざるは御政道の失ならずや。御穿鑿下さるべしと憚りなく訴ふれば。季武聲を荒らげ。御政道暗しとはあつぱれ汝は烏滸の者。して汝が

娘人賣に取られし證據やあると睥め付くる。加藤兵衞些とも臆せず。さん候。江州鏡山ひらぎの長が許にて。娘を見付け候ゆゑ詮議を遂げ候へば。北白河の廣文と申す者より。料足五十貫文に買取ると聞くより早く。廣文が宿所を尋ね候に。此の頃他國仕る由。さるによつて恐れながら御威光を借り奉り。武將よりお召しなるぞ廣文が妻子召連れ來るべしと。地所の庄屋に申し渡し候へば追付け引連れ參るべし。詞對決願ひ奉ると憚りなく言上す。詞賴光聞き給ひ神妙々々。汝が詞上を蔑するに似たれども。却つて政道を勵す一助。我何ぞ下聞を恥ぢんと宣ふ所へ。地北白河の土民ども。廣文が妻子連れて參りしと四十餘りの女房。十四五ばかりの子庭上に畏る。詞賴光御覽じ。廣文が妻子は汝よな。夫の廣文粟田口の加藤兵衞が娘を勾引し。鏡山の遊女に賣つたる條紛れなし。定めて汝もよく知つつらん。夫が宿所に居らぬ由駈落か。但し行く先知つたるか眞直に白狀せよ。少しも陳ぜば拷問させうずるわと宣へば。女房聊かわろびれず。夫の惡事を女の身にて存ぜねばとて。同罪遁るべきやうなく候へば。陳じても益なき事左樣の事は夢にも存ぜず。地いかさま過ぎし春の頃古傍輩の合力とて。浪人の營を助かりし事も候へば。詞若し其の子を賣つたる價にてやあるらん。それも詳しく存ぜず。又駈落かとのお尋ね。たとへ首を討たるゝとて。逃げ隱るゝやうな夫にては候はずさりながら。地一夜に變る人心夫婦の中とは申しながら。スエテ計らひ難しとぞ申しける。詞チヽ健氣なる申しやう。天子大嘗會の前なれば死罪は宥め助け置く。北白河の庄屋年寄。廣文を尋ね出し娘をきつと渡させよ。加藤兵衞も鏡山に同道して受取れ。地違背せば連れ來れ庄屋其の旨承れと。御座を立たんとし給へば親も庄屋も言葉を揃へ。其の間妻子とも逃げ走りも氣遣はし。とてもの事に廣文出づる迄此の女。牢舍仰付けられしかとぞ願ひける。詞賴光打笑み給ひ。チヽ逃ぐるといふとも唐土天竺へはよも行くまじ。津輕合浦筑紫の果王土の限りは武將の下知。僅かに圍ふ牢屋ばかり牢屋とはいふべからず。賴光が免すといふ詞を出さぬ其の内は。千里が野邊も牢屋たり逃げば逃がせ。地賴光が一言は千筋の繩ぞ罷立てと。簾中に入り給ふ文武の德の堂々と。威あつて猛からず實に。名將の源の。水上清き印には世々に。流れて家々の。平橘藤原や八百八十氏は多けれどめぐり。〳〵て盡きしなく猶。源の御代に住む民に。幸ありとかや。

第四　植込の大江山榮華は大格子の唐織

月も日も。庭より出でて。庭に入る。地廓の内の武藏野や。スエテひらぎの長が廣庭の。光琳風の築山を。フシ見渡す目さへ遙々と。谷の岩組葛折。筑波の山もはづかしの。森と茂りし植込は華麗を盡す。フシ物數寄の。松の作り木。作り枝小オクリ底の〳〵松風三味

線の轉手に通ふ細廊下。數寄屋が軒の南天に。長唄珊瑚珠繋ぐ珠簾萩は宮城野躑躅が岡梅や櫻の花紅葉。天より四季の仕着して。手形の外の色ずくめ。金ずくめなる身の榮花。金の冠を被ぬばかりフシしやくは持病にありとかや。地豫て催す檜舞臺も成就し。今日こそ爰を晴の能三番過ぎて中入の。熊野より直にお行水臺所にはどや〳〵と。五色の赤飯蒸し立つる。鍋釜ありたけ炊け炊けと女子呼びつゝ男ども。見物場掃く水を打つ樂屋に續く衣裳場に。お出入の藪醫針立。算用足らずの懸倒れ傳授覺えて手は利かぬ。古鼓のならずもの。其の外萬能一心の家業なし。詞扨も出來た遊ばす〳〵。米とる能太夫も跣足ぢやと。地慶庵とり〴〵御機嫌伺ふ折ふし。湯殿の内よりお上りいと呼ばはれば。アヽイと答へて禿ども。緞子縮緬天鵞絨裏の臘虎の蒲團三つ重ね。沈の脇足煙草盆。湯殿を出づるひらぎの長頭の鉢に立つ湯氣は。富士の煙の上もなきフシほとび過ぎたる湯上りの。地お伽どもがお髭の塵。詞扨も熊野の面白さどうも〳〵。よい衆のお客達が先づあの衣裳の結構さ。地お行水なされて追付け松風。皆待ちかねてござります。詞イヤ行水心が惡い。水ばかりに五人三人かゝつて居つて。京の水を切らしてかゝり湯に逢坂の水を使はせをつて。扨肌のあんばいの惡さ。金次第でならぬ事はなけれども。汲みたての京の水と嵯峨松茸のとりどり。此の二種が心に適はぬ。アヽ松茸時分に上り度いが道中が大儀な。舟いやなり馬嫌ひ。駕籠はふらつくヤア福庵。お主は地體京生れ若し貧乏公卿に近付があるならば。御所車一輛買うてくれ。地乘つて歩こと方圖もなき。月蓋長者の隱居フシせられし如くなり。見に來る人の空炊は。匂ひ渡りし橋懸二三の松を煙り來て。樂屋にちゝつたんほゝの調も伽羅に埋れて。スエテ皷の音さへかをり來る。詞あれ皷を調べるはもう次ゝを始めるか。俺が案内する迄始めるなというて來い。此の間いづれも勝手へ立つてしたゝめ〳〵。我も飯食はう膳を出せ。地そりやこそお膳と呼ぶこどり古金襴の膳覆ひ。誠しからぬ取沙汰も嘘で御座らぬ本膳は。春正蒔繪の價千金。かけ盤高坏二汁七菜手を盡す。餘所の振舞ひらぎ屋のフシ朝夕とこそ据ゑにけれ。地七度搗に七度篩。誰が水晶を飯にして精白厭はぬ白鷺の。せゝり箸して不機嫌顏。詞なんと世界にもう食ふ物は無いかい。明けても暮れても鯛の鯉のと食はれぬ物ばつかり。此の二の汁の鳥は何ぢや問うて來い。イヤ問ふに及びませぬ何がな珍しい物をとて。生鶴のお汁といふよりくわつと色を損じ。鶴といへば結構な物かと思うて。今時分の鶴脂が無うて喰はるゝ物か。打明けて犬に喰はせ。今持つて來た平皿は何ぢや。アヽ是は生鮭でござりんす。態々若狹へ飛脚を立て取寄せたと申されます。ムヽ若狹へ取りにやつた。こり

や出來したと地機嫌を直す食好み。朝暮珍物高直の魚鳥は直に小判かむ。フシ齒骨も茨木童子なり。地思ひ〳〵の大盞の。妓の威勢を劣らじと能の祝儀の贈物。ヲクリ花とは〳〵いへど木々に咲く花の。時節は。杉折の。雲足蝶形洲崎形五つ重ねの島桐の。紋を透しに手をこめて奥州が名を忍ぶ客。三五に義理を播磨潟。鹿樣よりと フシほのめかす。花紫が深い客。長堀の粹樣。金絲の網をすきかけて髭籠にこめし祇園坊。半ぶ御贔屓弓も引方靱のお客といふもあり。銀の毛彫の飾壺宇治の花香をそのまゝに。つめし昔も今橋と。逢夜がフシ客の名に渡る。瑠璃白玉の。玻璃壜に南蠻酒泡盛藥と汲むや玉の井が。お客方よりぞと我一に。コハリしづか卷絹金太夫。長門薄雲初紫色品つくす進上に。能い客持つて全盛と。先づ親方のナホス機嫌とるひどさぞ。思ひやられたる。地長大きに笑を含み。詞ムヽ是は太夫達のお客方より今日の花か。扨々懇な過分々々。是といふも其方衆が精出し客に廻つて。親方大事に勤むる故。さりながら勤め〳〵と思ひ酒過して煩うて下さるな。ヤお客の側でさぞ氣づまり。地ちとの間なりと寢轉んで休息なされ。親方と思ひ氣兼は無用。我等が大事の金箱達と。ふはと乘せても暴馬の フシ轡に手綱ゆるされず。地中にも長門は姉女郎なう奥州さん。詞半ぶ樣いづれも。旦那さんのよい御機嫌今の御訴訟申さうではあるまいかとつつと出で。折がな〳〵此のお願と傍輩殘らず申し合せ置きしは。あの病人白妙殿の事。旦那さんも油斷なう醫者衆も替へ養生は樣々なれど。次第々々に病も重り。鐵の鎖で繋いでも。此の度はあつち物と醫者さん達のお話。其の身は時節是非に叶はぬ事ながら。痛はしいは彼の西國の吉樣といふお客。新造からのお馴染は我々も存ぜし事。とても死ぬる道ならば。一日なりとも廓の外で死なせ度いとの歎き。我人果敢ない勤の身。兩方の心思ひやられます。地此の事は井筒屋から。度々お耳へフシ入れし事。地今日は別して總太夫中天神衆殘らずの御願ひと。半分言はせずアヽこまだるい。後を聞く迄もない。詞料簡して白妙に暇くれといふ事か。ならぬ事。白妙といふやつで何ぼう損をする。三十日餘り煩うて。勤はせず藥は喰ふ。人手は取る。地體此の吉とやらいふ田舍客めがきたない奴。六百兩で暇くれい暖かに。千兩の小判耳が缺けてもならぬ。定めて今日は此の客が見物に紛れて。逢ひに來る手管があると推量し。あれあの鼻の先の數寄屋へ病人めを打込んで置く。皆見舞に行く事無用。禿め等局の奴等でも。白妙に水でも喰はしたら棒縛り。新造の横笛め浪人の娘とやらぬかして。賴もしだてすると聞く。地數寄屋の側へも寄つたらば。縛り始めに括し上げてくれるといへ。客が大事いけ〳〵と。始めの笑顏引替へ。忽ちに閻魔顏 フシ面を被替る如くなり。地奥州ちつとも怖氣なく。

詞こりや旦那さんとも覺えぬ。お客から千兩出る程なれば。私等が何の口たゝきやしよ。餘りそれは情ない。慘うござんす旦那さん。何この長を情知らぬ慘いとな。扨は客に賴まれぐるに成つて訴訟か。六百兩に付けるを千兩といふ身どもより。慘いといふは客の事。知るまいと思ふか。白妙めは其の客の子を孕んでけつかる。見す〳〵我が子を持ちごもつて死ぬるを見捨て。まあ四百兩惜む物知らず。是が慘うあるまいか。妾を引張つて千兩取るか。但し千兩損するか。妾らを氣强うかゝらねば傾城屋はならぬ。一人に淸かくれば跡々の例になる。地情知らぬ親方と拗ねはたばつて勤め粗末にする奴等。棒の先で勤めさしよ。言ふな默れと睥めつくれば。詞なんぼ默れとあつても此の長門は默らぬ。千兩の損得は白妙殿一人の上。私始め數多の女郎。アヽ忝い賴もしい慈悲な親方と思へば。心健しう一人の客も取り外さず。内の爲になるやうにと身を忘れて勤める。ほんにいふぢやなけれど能の囃子のと榮耀榮華に誇つて。朝晩王樣の上がるやうな。二の膳三の膳酢いの甘いのは誰がいはす。ヤア旦那さん。總々の女郎の心が反れたら。五千兩や七千兩の損か見たい迄。その頤が三間程橫町へ飛びやんしよ。地ヤア旦那さんとぞせりかけらる。地どいつも〳〵憎い奴。詞女郎のお蔭で榮耀するとは。世界中の亡八屋に。せめて長が三分一眞似る者が何處にある。持つて出た身の果報でする榮耀。地頤が三間程歪むか歪まぬか。是見よと立上り兩足にて蹴て蹴て蹴散らす本膳二の膳。刺身の鯉は煮物に躍り。練味噌がぶる牛蒡どろぼう。鯛のあへ物飯も汁も和雜鱠。劍に置いたる フシ茗荷の程ぞ恐しき。地在り合ふ女郎わつとばかりに逃げんとす。詞こりや一人も動くな。遣手ども男ども繩もて來い棒もて來い。頭取は長門めと。地小柄摑んで引寄する。一千太四郎鼓片手に素襖袴。アヽこれ〳〵舞臺へ聞えると走り出で。先づ御堪忍〳〵と捥ぎ放し。きつと睥めつけこれ女郎ども。詞なぜ御機嫌を損ふ。面々の御客を捨て白妙が妾へ出る事か。重ねてぐつともいうたらば此の太四郎が堪忍せね。慮外ながら親父樣も親父樣。今日は歷々方の集り。家内にての我が儘に點打つ人はあるまじと思ふは我が身一分の理。世間の人が許さぬ。其の證據御覽なされ。只今我等此の鼓を調べしに。御存じの折居の胴。打つて見ればほと〳〵と桶の底を叩くやうなり。肝を潰し革を外せば何者の仕業にか。胴の中にお前の惡事。一家の惡口を料理の獻立能の番附。二通に書いて入れ置きし。エヽ地無念千萬此の如く。後指をさゝるゝとは知らなんだ。一分が廢つた。讀むも淚が零るれど。詞これお聞きなされ料理獻立。お汁世上の人を淡味噌。自慢くさい葱。面の皮牛蒡二つに切り鯛。明日御めし。煮物は傾城打擲の棒鱈。燒物は取沙汰紡紼。人間の葛醬油かけ

て。驕る者久しからづけの香の物。引れて嫁菜。さるぼう。はぢ蠣の吸物。抱への女郎伊丹の諸白。エヽ口惜しい皆迄まだ〳〵讀まれぬ。是また能の番附。大きな(翁)千歳さん〳〵そう。脇能身の程白髭。八島のくづれ。諸道具のけばの梅。兩の手に鐵輪。世間で善知鳥。親子籠太鼓。跡は天鼓微塵。聞かつしやれたか親父様。親子の耳へ入るからは國中は一杯。地なんと恥を雪がうぞ。エヽ〳〵口惜しい無念やと。寸々に引裂き。疊に打付け〳〵てスヱテどうと坐り。泣き居たり。アヽ詞氣の小さい其の心で長が跡は繼がれまい。此の榮耀の叶はぬ奴等が皆猜んでいふ事。何年か此の方人の噂に乘る男。それ程身代殖ゑて來る。ひよつと人に譽められては跡の身持が難しい。いふ奴にはいはせて置け。地構はぬ〳〵あれ狂言が始つた。松風の用意せう。裝束ども持て來いと。怯む氣もなき氣の强さ。そも人間の皮一重下は恐ろし上皮は。先づ美しき上臈の面を。持たせて三重へ入りにけり。フシ表に離す。地松風の爰にも吹いて白妙が。身に浸み渡る病の床。誰わくらはに問ふ人の數寄屋といへど隙間なき。障子一重を開くるさへ。力なじみの彼の人の。顏見る事の叶はずば。せめてどうかと一言の便が聞いて死に度いと。知らぬ來世のフシ闇よりも涙。中有に迷ひけり。地人に心を置鼓。横笛が幼名を直に附けたる竹の名の。身は川竹とフシ成るためし。地衣裳の模様は仕立口。着馴れぬ物を無理やり手が。步き振にも非難いふ。人目を盗みわくせきとフシ急ぎにけらし。白妙が。病の枕に立寄りて。お目あいてかやと言ひければ。重たき目許にじろりと見て。ナウ横笛殿かいの。よい女郎に成つてぢやの。奇特に見舞うて下されし。見る目嗅ぐ鼻より恐ろしき親方の目を忍び。よく〳〵心にかゝればこそ。年もいかいでしをらしい嬉しうござんす忘れはせぬ。暇の事を傍輩衆が身に代へての訴訟。端々聞えて志の嬉しさと。親方の辛さとは如何なる世にか忘れうぞ。地吉様に逢ふ迄まちつと生き度い〳〵と。今朝迄も思ひしが物いふ事も力なく。此の胸の苦しさは大方今夜が往生。これ此方頼むぞや。詞此の抱いてゐる紋付は彼の人様の形見の袷。棺に入れて下さんせ。地持ちごもりて死ぬる身の目を塞ぐと其の儘。井筒屋迄知らせて彼のお人の回向が。受け度いわいのとフシ打伏して泣く。涙さへ弱り行く。詞チヽそんな事氣遣ひせず。心慥かに持たしやんせ。私は常にも申す通り。嫁入する迄身を自堕落に持つなと。かゝ様の遺言立つまいかと。それは〳〵悲しうて死なうやうにも存ぜしに。長門様の才覺にて。此の度の水あげとやらいふ事を。彼の吉様をお賴みゆゑ。私に帶も解かせず御主は間をかへ。床の側へも寄せ付かぬ様になされし故。今日迄身を穢さず。親の遺言違へぬ。地此の御恩送りにはたとへ内へ漏れ聞え。づたづ

たに刻まれても。詞ちよつとなりとも生き世の中。逢はせましたさ能見物に紛らし。顔隠してあれ迄と。地言へば覺えず起直り。アヽ有難い忝い早う逢ひ度いどれどこに。あれ〳〵あれにゐさんすと。這出づるをこれ申し。詞何おしやんすあれは庭の松の木。吉樣ではないわいなと。地抱き止むれば。詞アヽ扨は目もはや眩んだか。地もう死ぬるに間はあるまい。死際の顔を見せ。嘸かし樣が悲しかろ。私や又それが悲しいとスエテ又伏し沈む。ばかりなり。地横笛見る目もやる方なく。早う逢ひ度い見度いと心のせくは理ながら。あの入込みの人々の目を忍び。橋懸の椽の下より。泉水の際を廻らねばどうも爰へは參られず。物數言はず聲低に。お二人が顔ばかり見つ見らるゝを樂しみに。聲立てて下さんすな人が聞付け見付けては。吉樣は大事のお身後の詮議が喧しし。必ず靜かに〳〵と囁く中に笛鼓。あれ能が始まる此の紛れに。首尾して連れましてやと行く振は。長地いつの間にやら里馴れてしやんとかい取る飛石の。三つ地五つ地一聲のオクリ音に紛らす忍路や。ハルフシ忍び男の。忍び風。頭の上は橋懸。謠ふ謠の松風に。ギン身は村雨と袖ひぢて小オクリ涙に。絞る頬被。鼓も耳にびく〳〵と。秋風越ゆるは須磨の關フシ越すに越されぬ金の關。地盗みせぬ身も盗人の。忍ぶに似たる篠竹の枝折戸に佇めば。白妙待兼ねナウ吉樣かいのと起きるにも腰立たず。立上れども足立たず。男も垣に取付いて聲を忍べば招き合ひ。心を中に通はせて年を隔ての天の河。涙を淵とせきかくるフシ稀の逢瀬ぞ哀れなる。地白妙やう〳〵椽際迄這出でて。ま一度逢ひ度い〳〵と思ふ念が届いて。嬉しう往生しますれば思ひ置く事なけれども。大事の子を身に宿し浮世に殘し置きもせず。未來へ連れて行くわいのと。スエテ又さめ〴〵と泣きれば。チヽそれも前世の約束。引手數多の身なれば面々の果報により。大名貴人の北の方とも成るべき人。思へば此の吉は其方の出世の妨。あれあの謠を聞きや。ウタヒ身にも及ばぬ戀をさへ。すまの餘りに罪深しとはフシ我が事よ。地此の下に襲ねしは二人寢し夜の其方の寢衣。形見に肌を放さぬぞや。ナウ我とても同じ事。過ぎにし事を思ひ出せばなつかしや。三歳は爰で馴染をかけ。何事も皆夢と成る。此の形見の紋付ばかりはフシ殘れども。謠同音是を見る度に。いや增しの思ひ草葉末にむすぶ露の間も。忘られぱこそ味氣なや形見こそ今は仇なれ是なくは。忘るゝ隙もありなんと地あれ謠にうたふも理。一日も夫婦とて世に住むかひのあるにこそ。忘れ形見何にせうぞいの謠同音捨てても置かれず取れば俤に立ちまさり。起臥わかで枕より。跡より戀のせめ來れば。詮方涙に伏し沈む事ぞ悲しきフシ折も折なる松風の謠が泣かす二人が中。横笛内へ立廻り。詞いとしや側へ寄り度いかまだ五段の舞がある。地

此の間にちよつとと戸を明くれば。吉助前後の辨へなく。是はとばかり走入り抱付けば抱締めて。語る事ない言ふ事ない。極樂でも地獄でもついて往き度いばつかりぞ。エヽ忝うござんすと。互の肩に互の顏。打ちもたれ合ひ フシ咽せ返り泣く。忍音に横笛も。つれて。袖をぞ絞りける。地男やうやう涙を押へ疊を叩いて。詞エヽ心に任せぬ成れば成り行く身の果かな。とても死ぬるに極らば。一日でも一夜でも身が手へ引取り往生させ。今生の名殘に入棺も葬禮も手にかけんと。思ふ心一筋に。六百兩と言ひかけしに。無得心の長めに足許見られ。千兩なくては暇くれまいと言ひ募つて埒明けず。吉助が子を懷妊すれば本妻同然。僅か四百兩惜んで。廓の中で持ごもりに殺した。穢い奴と。人でなしの長めに蔑まるゝ此の無念。地身を切裂いても晴れやらず。ごくに立たぬ身の上咄。語つて益なき事ながら。詞我が親迄は人に知られし名ある武士。仔細あつて浪人し。我五歲の時西國今の親の養子となり。氏を變へ苗字を捨て。算盤秤を取りしより。地生みの親とは音信不通住所も知らねばまして生死の便も聞かず。今の親は商人の一錢をあだにせず。手代どもの算用嚴しくて。詞金銀は我が物ながら水の月。目に見るばかり手に取られず。されども指いた一腰は實父の讓り。大國二箇國三箇國の價ともなる名劍。寶は身の指合代なして。其方が身の代と方々主を尋ぬるに。ナウ是非もなや。我が冥加に盡きたるか。千兩とも萬兩とも限り知れぬ此の太刀を。漸う二三百兩五百兩。六百兩より上に直を付くる者なければ。地神を恨み佛を恨み。唐高麗へも渡られず。詮方更にあらばこそ。むざ／＼と廓の中で身を果さす。ふがひなき男持つたよな。今の恨みは此の太刀我が腹に突立てば。人の命は取るべきが。白妙といふ女の身一つを助けぬ物。寶とは誰が名付けしぞ竹の篦には劣りしと。柄を叩き鍔を打ちかつぱと伏して泣きければ。白妙も手を合せ餘り冥加恐ろし。數ならぬ此の身ゆゑ重代の寶を放そとは。左程私が可愛いか。因果な者に馴れ染めて苦勞させますおいとしやと。二人が繰言 フシ悔みごと盡きせぬ。涙ぞ道理なる。地側に聞きゐる横笛涙に沈む顏振上げ。あれはや能の切果てると其の儘衣裳脫ぎに。あれからは一目なり。咎められてはどちらの爲にもならぬぞや。チヽいつ迄も同じ事。今が末期の暇乞。さらばでござんす。來世で逢はう。さらばやとスヱテ立つて見居て見羽拔鳥詞同音クル闇路の鳥も聲々に夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかりや殘るらん／＼地へそりや果てた南無三寶始めの道は人立あり。樂屋からは猶ならず。ハアヽどこから戾しましよ。それ／＼其處へ親方が裝束で。隱るゝだけは先づ爰へと。白妙が夜着の裾に押隱し。横笛上に打凭れ フシ障子はた／＼さしこめたり。地

長は風折水干。後見お出入どや〳〵と。詞ハヽア出來た〳〵。殊に舞の内我も木蔭にいざ立寄りての思ひ入れ。地息がはづむと大團扇煽ぐやら擦るやら。先づ面脫がせませ。汗を拭へと寄りたかる。長烏帽子被ながら。詞なんと松風出來たか。此の裝束で直に愛で自然居士をして見せうかの。脇の人買が櫓櫂を以つて散々に打つ。ウタと身には繩口には綿の轡をはめ泣けども聲の出でばこそといふ所を面白うして見せう。地男ども樫の木の棒持て來いやいと呼ばはれば。常の氣知りて下人ども。フシ二言と呼ばれず走り來る。詞只今揚幕入りさまに。面の内からちらりと見た。病人めが居る數寄屋へ。何者が逃込んで。障子をさすを見付けた。あれ捜して引きずり出せ早う〳〵。用捨せば共に片端喰はすぞ。はつちや怖しと會釋もせず。障子を明くれば横笛が。身を顫はしてゐる所を。旦那の御意ぢやと荒氣なく人のもてなす花盛り。落花微塵に引出す。胛の臓強き大音にて。詞こりやびりめ。此の長が日頃の手並知りながら。今から野太い根性さけ。後には己れ何になる。病人めに何用あつて誰に頼まれた。地サアぬかさぬかと振上げて。二三十めつた打ち起直ればはたと打ち。居直れば丁ど打ち。髪も頭も分ちなく。簪笄打折れて鼈甲飛んで亂れ髪。フシ骨も散るかと哀れなり。地横笛聲も涙にくれ。詞白妙樣へ見舞うたは誰にも賴まれませぬ。餘り見る目もいとしさ故。今死ぬるお人にちよつと見舞に行つたとて。科緩怠に成るならば。殺しなりとどうなりと餘りな旦那殿と。地言はせも敢ずうぬが口から殿呼ばり。詞それ眞裸にして庭の松へ括し上げい。地はつといふより情なく帶引解けば一家の女郎。それ程の科もない人を。こりや餘りな旦那さん。新造は撲たさぬと駈寄る所を棒横たへ。詞一つ穴の狐どもと十方滅方撲ち廻せば。地撲たれて左右なく寄り付かず横笛骨も砕くるばかり。弱る心を取直し。詞ナウ傍輩さん達怪我して下さんすな。わしが事は構はずと置いて下さんせ。これ殿といふた腹立に。恥かしい裸にして縛りやつたの。なんぼでも言ひ止まぬ。旦那殿どの〳〵どの。地エヽ情ない死なしやつた母樣ならで。友達にも見せぬ女子の肌を口惜しい。此のよな姿は地獄の繪に見たばかり。詞鬼め童子め茨木童子め。地白妙さんと此の横笛が妄念が。其方の身に報はうと。涙交りの雜言は フシ人の泣くより哀れなり。詞エヽにつくい奴め。それ男ども臺所の大根一本持て來いと。地又五つ六つ續け打ち打たれて雪の裸身も。フシ消え〳〵とこそ成りにけれ。詞申し旦那樣此の大根何になされます。何になさるゝとはそれ捻ぢ込め。此の大きな物どこへ捻ぢ込みましよ。詞けた叩く口へ捻ぢ込め。地畏つたと口押割らんとする所へ。數寄屋の障子蹴破つて吉助堪らず飛んで出で。大根取つて下部が面はたと打ち。横笛が縛捻ぢ

切れば。半死半生これ傍輩達。勝手へ連れて看病あれと取つて押退け。長が前にどうど坐し。詞こりや長。白妙と二世の契約せし。西國の吉助といふ男。白妙が病氣見舞ふが科ならば。横笛よりも先づ此の男打殺して腹を癒よ。サア撲て撲たぬか。長地恐ろしいかなぜ撲せぬと責めかくれば。詞ヲヲ己れとても商ひ物に忍び逢ふからは盗人よ。此の長が撲ち兼ねうか。サア腰の刄物を渡せ。ムウ此の刄物が怖さに得打たぬな。ヤイ此の刀はちと由緒あつて。うぬらが如き根性の穢れた。犬同然の奴に拔く刀ぢやない。氣遣ひせずとも寄つてぶて。但し怖いか。地なんの怖いと打つてかゝる棒の先。しかと取つて拂ひのけ。つつと入つてかつぎ上げ大の法師を蜻蛉返。ぎやつとのめらせ馬乘りに。どうと跨り握拳に息吹きかけ。七つ八つ十二三フシ頭も碎けと揣廻す。地一子太四郎飛んで出で。そりや親父樣投げた打殺せ大事ない。まつかせと立ちかかり家内が寄つて棒ずくめ。フシやう〳〵長を引退くる。地吉助は只一人取付けば挘ぎ放し。頰がまち椽がまち。腕骨腕木障子の腰骨。肩膝足の踏みどなく。誰が撲つやら喰はすやら棒に別ちは。なかりけり。地足は立たず目はくるめく。衣類も裂かれ髮亂れ。心ばかりの亂れねば己れいつかに傾城屋の法なればとて。掏兒强盜を打つ如く。よつく恥を與へしな。我が親の世なりせば。一一獄門にかくる奴なれど。詞町人のあさましさ女郎屋へ忍び込んだる誤なれば。地エエ此の儘殿き殺さるゝ。ヤレ白妙死出三途を連れ立たんと。廊下傳ひの欄干を。力に取付きたぢ〳〵たぢ。這上つてはよろ〳〵よろ。オクリよろぼひ。〳〵歩み付き。數寄屋に入つてヤア白妙ははや息絕えしか。先立ちしかといふ聲に。家内はつと驚く折柄。遣手の龜が慌しく。詞ナウ新造の横笛樣が剃刀で自害して。まだ死に切らねど深疵。かう申す内も危しと色を違へて言ひければ。地さしも野太きひらぎの長。フシぎよつとしてこそ見えにけり。

第五

地へかゝる所に北白河の廣文。親子夫婦在所の者。加藤兵衞倅ひつか〳〵と入つて。詞なうなう長殿先程より。公用に就いて御意得る如く。度々申し入るれども取合はれず。當春我等が賣りし横笛取戻して。本親へきつと渡すべしとの上意に候へども。其の時の五十貫今更一錢なければ。取戻さん力なき故。此の琴柱と申す我等が娘を代りに取り。横笛を此の親父加藤兵衞殿へ渡してたべ。地其のため所の庄屋組中。同道致すと述べければ。詞長不興顏にて。ム、此方が横笛が父御か。此の方商賣の作法で。元銀に十倍增しても取戻すの代りのといふ事致さねども。そこは身が料簡してやらうが。其方の娘はたつた今自害して。十死一生。それとても換へたくば此の方は換へ得。相手同士の詰開き〳〵。地加藤兵衞はつと

ばかりに氣も狂亂。詞いやさ命あつての詰開き。死なぬ内先づ會はされよとせきければ。地遣手ども口々に。其の身も父御のお出と聞き逢ひたい望み。只今是へと手負を閨の床ながら。そろ〳〵舁いて出づる體。父は目もくれ走り寄り。ヤレ横笛父なるわと朱の血汐に抱付き。手足を廣げ身を撫でて。疵もとつくと見屆け自害の疵より棒の跡。死したる母が美しう。生み付けたる肌を空所なく撲たれしは。自害せずとも死ぬべきに是を無念の自害かや。寧そ敲き殺されば。敵を取つて腹癒んもの。可愛や逸まつて思ひをかけてくれるかと。人目も恥ぢず フシ聲を上げ伏沈み。てぞ泣きゐたる。地横笛父の手を取つて。ナウ撲ちたゝかるるは常の事。今死ぬる病人さへ憾い辛い親方なれば。我一人無念なと思ふでは。フシなけれども。流を立てて母様の遺言背く悲しさに。あらぬ歎きをかけますと父を見上げ見下して。泣聲もはや息切れして最期近くぞ見えにける。地廣文が娘側に寄つて涙を押へ。おいとしや皆我が親の所爲故。此の春よりの憂さ辛さ御身の上を思遣り。自らが代りに殘り御身を戻さんと。是迄は參りしに敢ない死を遊ばす。詞なう父上たとへ此の身が代らぬとて。あのお方の最期を見てすごすごとは歸られまじ。家を出づるより覺悟ぞや。我を庇ひ給ふなとさも潔き言葉の末。地ヲヽ出來いた〳〵と取つて引寄せ刺通さんとする所を。母暫くと押止

め。人の子殺して我が子を助けうではなけれども。世には療治もある事。此の子殺して若しあの子の疵本復あるならば。こちの娘は誰が生んで返さうぞ。なう横笛樣。地助かるも死ぬるも一人と思へど二人の命。氣を慥かに持つてたべ。看病してたべ人々とスエテ悶えこがれ泣きけれども。地女郎遣手も哀れさに。どこぞでは此の家に大きな事が。出けう〳〵と思うたと。フシ袖を絞らぬ者はなし。地今を最期の横笛。なう父上必ずあの子を助けてたべ。是のみ黄泉の障りぞや。わしや來世で母樣に久しうて逢ふが嬉しい。南無阿彌陀の一聲も眠れる如く息絶えたり。加藤は死骸に抱き付きスエテ前後不覺に取亂す。地廣文娘を引寄せ既にかうよと見えける所。加藤あわてて抱き取りいかな〳〵思ひも寄らず。詞不便の娘が只今の遺言。父母の遺言より默止されず。此の子を某申し請け名を横笛と呼ぶからは。我が子が再び蘇つたる同然。地我が子

に指もさゝせぬと。猶だきしめて放さねば。夫婦あつと フシ悦び涙。地廣文何とか思ひけん胸押寛げ拔いたる刀。腹にぐつと突立て脊骨をかけて引廻す。人々是は狂氣かと驚き騒げば。詞アヽ騒ぐまい〳〵と押

鎭め。ナウ加藤殿。我も昔は弓矢打物取つて。誰に劣らぬ身なりしが。主君の諌言耳に逆ひ。勘氣を受けて此の態。若かりし時忍び妻の腹に男子一人儲けしを。商人の養子となし。其の後此の娘一人は持ちたれど

も年寄るに従ひ。世に力なく便りなく。兄めを他人にくれずば弓矢の家を興し。老の樂み浪人の憂き目は見まじいもの。惜しや悔しや子程の寶は無きものと。我が身の上は見ゆれども。人の上には盲同然。地洛中變化蜚つて夜な〳〵人を失ふ由。これ幸の紛らしものと。思ひ初めたる一念が。地獄の道の フシ門出なり。詞なう加藤殿其の子が素性もきたなからず。平家の大將常陸介安盛が執權。八郎權の頭秀國とは我が事よと。地いふ聲に吉助覺えず。廊下を飛んで出でなう父上か。我こそ商人の養子となりし。本名は右馬之允と縋り付けば。寄るまい〳〵。詞子ではない右馬之允といふ子は持たぬと。地睥めつけられて聲をあげ子でないとは情なや。詞御無沙汰の不孝は御免あれ。何僞りを申すべき。紅葉狩の此の太刀を證據にて。地親よと子よと只一言御詞を。願み奉るとスヱテどうと伏して泣きければ。ヲヽ詞太刀に僞なければとて親子とは何事ぞ。五つより其の年迄人と成りしは誰が養育。地玄冬素雪の寒き夜。ハル夏三伏の暑き日に老いたる親を養ふより。子には心の碎かる〻。その憂き苦勞を人にかけ。まんまと育て上げさせ。誠の親よ實子よと親しみ寄り。養ひ親の心に滿足せうか。何と嬉しかるべきか。飛びしされ子ではない。詞なう加藤殿。とても事に此の母も其の子が乳母となしてたべ。これ兩人。加藤殿へ忠孝勵み我を親と思ふなる。一遍の念佛も親と思はば受けまじきぞ。他人と思ひ回向せよ。一日の精進も養ひ親への無禮なり。淚一滴零しなば七生迄の恨みなり。地お暇申す加藤殿横笛殿さらばやと。刀を拔けば紅の。紅葉における秋の霜 フシ消えて果敢なく成りにけり。地女房娘右馬之允遺言重んじ泣かぬ顔。加藤兵衛所の者前代未聞の義士貞女。死骸どもは跡より母横笛は先へ歸れといひければ。長大聲あげどこへ〳〵。詞横笛が代りにて名も横笛と呼ぶからは。そのま〻こつちの抱への内。手形の通り勤めさす。暇が欲しくば五十貫に廿割増し千貫目積め。男ども横笛をとめ。地親兄弟捧ずくめにして追出せ。敲き出せといふ所に俄に表騒がしく見世も格子も打割ろばかり。坂田の公時眞先に貞光季武綱保昌。山伏出立に込入つて。上意々々と金剛杖ぶち伏せ〳〵。詞誰かある親子共にあれ括れ。地承ると加藤兵衛吉助踏付け〳〵縛り付けて引掴める。渡邊の綱進み出で。詞やい長承れ。己れが奉公人の抱へやう人買同然の仕方。其の上折檻嚴しく拷問をまなび。殊には歷々の町人さへ。慎む程なる驕身の程知らず世を憚らぬ我が儘。其の外數箇條の罪科。とつく召捕らるべき所酒呑童子退治に弓箭の御用。繁多の間宥免せられしなり。童子易々退治あり御歸洛の道より直に。我々仰を蒙つたりと言ひ渡す。公時踊り出で。女郎せぶつて摑み取つた一歩小判の金が罰。地覺えたかとこんと喰はす頭の鉢。フシあたりも響くばかりなり。地長頭を下げ一々誤り奉る。世上の人も聞き給へ驕る者久しからず。我人に辛ければ人亦我に辛しと。口にはいへど心に知らず。かう災難の來る時始めて悔むにかひもなし。地重罪は我一人あの悴助け下されと フシ淚に沈むぞ心地よき。地兎角は都の御沙汰ぞと警固嚴しく引立つる。酒呑童子茨木童子。退治あるも世の誡め。政道確く賴光は朝參院參お振舞。ギン京近國の悦びたる。賑ひたるに酒樽にだいだいの。御代こそめでたけれ。